Fate/if

大葉景華

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｆａｔｅ／ＧｒａｎｄＯｒｄｅｒにおける２部の敵キャラ。　クリプター達やカルデアのメンバーが生き残っていたらのｉｆ小説です。

藤丸立香は男です。

目次

プロローグ 1
運命の分岐路 4
出会いと始まり 17
第零特異点　邂逅 27
覚醒　そして帰還 33
幕間の物語 44
第一特異点　聖女と竜の邂逅 53
第一特異点　竜の魔女 56
第一特異点　竜殺しの英雄 61
第一特異点　二人の聖女 67
第一特異点　聖剣の在り方 69
第一特異点　決着　サイドＡ 77
第一特異点　決着　サイドＢ 83
第一特異点　最終決着 87
幕間の物語 92
第三特異点　大海原への船出 99
第三特異点　女神の島 105

プロローグ

目眩がする……。　さっきやった模擬戦闘シュミレーション？　って奴をやってから考えがまとまらない……。

さっきの人ら……英霊？　だっけ……。　あの青い服を着た女の子……綺麗だったなぁ。

「……い。　……下さい。　……起きて下さい！」

誰？　俺を呼ぶのは……？　でも、もう目を開けるのも億劫なんだ……。

意識が沈む……。

??????? ??

「フォウフォウ。　フォフォウ？」

「フォウさん。　もっとてしてしして下さい。　そしたらこの人も起きるかもしれません」

さっき意識が途絶える寸前に聞こえた声だ。

周りの確認しようと目を開く。　そこに居たのは薄紫色の髪をした少女と、白い……犬？　リス？　よく分からない手のひらより少し大きい生物がいた。

「う……君……は？」

「大丈夫ですか？　先輩」

「先輩？　どういう事？」

俺がそう聞いたら後ろから声がかけられた。

「やぁ、目が覚めたかい？　マシュは君が目が覚めるまでずっと傍にいてくれたんだよ」

そこに居たのは緑のスーツに身を包んだ温和そうな見た目をした男性だった。　にこやかな笑顔をしているが……俺にはどうしてもその笑顔を信用する事が出来なかった。

「そうだったのか……。　えっと、マシュ？　さんだっけ？」

「さん付けは要りませんよ、先輩」

「さっきもそうだけど、先輩って？」
「マシュは君の事を先輩とする事に決めたらしいね。　マシュには事情があってね。　良ければ君が先輩になってはくれないかな？」
「まぁ……良いですけど。　改めてよろしく。　マシュ」
「改めて自己紹介ですね。　私の名前はマシュ。　マシュ・キリエライトです」
マシュ・キリエライトが差し出してきた手を握りながら応える。
「俺は藤丸。　藤丸立香」
??????????
あとはよろしくと言ってレフ教授は行ってしまった。　さっきの胡散臭そうな感じは気の所為だったのかな？
「所で先輩はどうして廊下で寝ていたんですか？　もしかして、ベットではなくて床でないと寝られない性癖のお方ですか？」
「いや……そうじゃなくて。　俺、実はさっきこのカルデアに来たばっかりで、その時にした戦闘シュミレーションをした時に妙に疲れちゃって」
「そうだったんですか。　でも、シュミレーターでの召喚はほぼ魔力を消費しないはずですが？」
そう言われても……気まずくて髪をカシカシとかきながら言う。
「いや……そもそも、俺が何でここにいるのか分かってないんだよ……。　献血の検査中にいきなり変な職員に呼び出されて、その後白服の集団に君が必要だって言われて……。　そもそも、魔力って何？」
俺がそう話すと、マシュはポカンとした顔で俺を見つめた。
「……つまり先輩は魔術とは何かを全く知らない一般人なのですか？」
そんな話に聞いた事あるけど実物は見た事ないような珍獣を見たような顔をされても……。
そんなやり取りをしていたら、通路の向こうから足音が聞こえる。
まぁマシュの話によればマスター？　ってのは俺を含めて４８人いるらしいし。　それ以外のスタッフがいてもおかしく……

!?違う！　同じマスター？　サポートのスタッフ？　そんなレベルじゃない！　同じ人間なのか？　魔術なんて今まで聞いたことも無い俺ですら分かる、これが魔力！　通路の向こう側の人が近づくだけで体が強ばる……！

「先輩？　どうかしましたか？」

「マシュ……通路の向こうから来る人達は……？」

俺が嗄れた声を絞り出すと、マシュが向こうの人に手を振りながら応える。

「はい。　彼らこそカルデアに集められた４８人のマスターの中でも最高の魔術師達。Ａチームのマスター達です」

この人達がＡチーム。　最高のマスター達。

キリシュタリア・ヴォーダイム

オフェリア・ファムルソローネ

カドック・ゼムルプス

スカンジナビア・ペペロンチーノ

芥　ヒナコ

ベリルガット

デイビッド・ゼム・ヴォイド

もし、彼らに合わなければ。　そんな運命を感じずにはいられない。　今日を迎える。

運命の分岐路

「マシュ。　彼は？」
先頭の金髪の男が俺に目を向ける。　その目線に敵意が無いのが分かると、とりあえず胸を撫で下ろす。
「ヴォーダイムさん。　彼はついさっきカルデアに到着した最後のマスターです。　名前は……」
マシュが俺を紹介してくれようとしたが、ヴォーダイムと言われた男が制した。
「いや、彼の口から直接聞きたい。　いいかな？　最後のマスター」
「……はい、大丈夫……です」
「んもぅ！　そんなに緊張しなくても大丈夫よぉ！　別に取って食べたりしないわ！」
後ろからそんな声が聞こえる。　剃りこみを入れた長めの髪型。口調から女性かと思ったけど体系的にあれ男だぞ？
「ぺぺ」
ヴォーダイムが窘めるように言うとぺぺと言われた男？　は下がった。
「さて、こちらのメンバーが失礼した。　改めて自己紹介をお願いするよ」
「はい。　藤丸……立香です」
俺が自己紹介……て言っても名前だけだけど。　兎に角名前を伝えるとヴォーダイムは噛み締めるような顔をする。
「ふむ……いい名前だ。　私の名前はヴォーダイム。　キリシュタリア・ヴォーダイムだ」
さっきのマシュと同じように手を差し出してくる。　俺の手をマシュとは違ってしっかりと握ってくる。
ふと、ヴォーダイムの右手の甲に赤い印がある事に気づいた。
「あの……ヴォーダイムさん。　その手の甲の赤い印は？」
俺が聞くとヴォーダイムが答える前に後ろから少しボサボサの銀髪の男が出てきた。

「そんな事も分からないのか？　これだから外部からの魔術の何たるかも知らないペーペーは嫌なんだ」
む、確かに俺は魔術がどうとか全く分からないけど。　何だあの敵対心剥き出しの言い方は。
「カドック」
「……ふん」
カドックと呼ばれた男が手をかざす。　カドックの手の甲にもヴォーダイムとは形が違うが赤い印がある。
「これは令呪だ。　僕達マスターは過去に生きた偉人を使い魔、サーヴァントとしてこの世に呼び出す。　この印はサーヴァントをこの世に繋ぎ止める楔であると同時にサーヴァントに絶対の命令を課すことが出来る魔力の塊だ。　見てろ」
カドックが手をかざすと令呪と呼ばれた印が赤く光り、空間か震え出す。
「何を？」
「カドック！　まさか君、ここでサーヴァントを呼び出すつもりか？」
「この世間知らずに魔術の世界を教えてやるだけさ。　さあ来い！　キャスター！」
カドックがそう叫ぶと目の前の空間からいきなり女の子が現れた。
見た目はただの女の子なのに、本能が告げる。　あれは人間とは根本が違う生き物だ！
「これが僕のサーヴァントだ。　サーヴァントは本来の名前
真名を呼ぶのを避けてそれぞれ割り当てられた七種類のクラスで呼ぶのが普通だ。　僕のサーヴァントは魔術師のサーヴァント。キャスターだ」
キャスターと呼ばれた女の子は俺を1瞥しただけでフンと顔を背けてしまった。
「ねぇ、マスター？　もしかしてあの坊やに私を見せびらかすためだけに私を呼び出したの？」
「なんだ、文句あるか使い魔」

「別に」
そう一言だけ言うとまたすぐに消えてしまった。
「カドック。　サーヴァントはただの使い魔ではない。　信頼関係を結ばないといつか後悔するぞ」
「ふん。　僕は僕のやり方があるんだ。　エリートには分からないだろうね」
カドックがヴォーダイムを睨む。　カドックが今にも噛みつきそうな剣幕なのにヴォーダイムは涼しい顔だ。
「……まぁいいだろう。　その話はまたいつか。　さて、藤丸君だったか。　私の事は気軽にキリシュタリアと呼んでくれて構わないよ。　君の事も立香と呼んでいいかな？」
「あ、ああ、大丈夫っす」
「そんなに固くなることは無いよ。　丁度時間もあるし今から少しお茶でも……おや」
キリシュタリアの視線の先にいたのは、さっきの男。　レフだった。　無意識のうちに構えてしまう。
「やぁ、ヴォーダイム。　探したよ」
「私達に何の用ですか？　レフ・ライノール」
「いや何、貴重なAチームの動向を把握するのも私の仕事の一つでね」
「それは結構な事で。　これからこの立香君とお茶をするので、失礼。　立香君。　行こう」
さっきのカドックに喧嘩を売られた時ですら涼しく流したのにレフ相手だと分かりやすいくらい敵対してる。
「あ、はい。　マシュも行こう」
とマシュの手を取ってこの場を離れた。　レフは最後まで俺達をにこやかに見送ったけど、どうしてもレフの事を信用出来ない……。
??????あのゾワッとする感覚は何なんだろう……？
??……さっきはすまなかったね。　見苦しい所を見せてしまった。
どうもあのレフ教授は苦手でね」

招かれたのはキリシュタリアの自室。　流石Ａチームと言うべきか、広々としていて食器も金がかかってそうだ。
「いえ、俺も何となくあの人は苦手です」
俺がそう言うとキリシュタリアは少し微笑んだ。
「そう言って貰えると幾分か気が楽だよ。　しかし、ペペやオフェリアはいつもの事だが。　カドックとマシュが来るのは珍しいね。勿論歓迎するよ」
ここにはキリシュタリア。　俺。　マシュの他に眼帯を付けた茶髪のセミロングのオフェリアと呼ばれた人とさっきのカドックがいる。　カドックは俺とキリシュタリアが呼んだから来たって感じだけどオフェリアさんはしれっと付いてきた。
「先輩が行くなら私も参加させて頂こうかなと。　……迷惑……でしたか？」
マシュがおずおずと尋ねるが、カドックがまた噛み付くように言う。
「迷惑なもんか。　こいつ、ほぼ毎日訓練の後に涼しい顔して僕らをお茶会なんてものに誘うんだ。　こちとら凡人組にとって訓練だけでヘトヘトだって言うのに」
「カドックは少し気を張りすぎな所があるからね。　私なりに解してやろうと考えたんだが……。　逆効果だったみたいだな」
「全くだ。　次からは遠慮して欲しいね」
「でも、俺はキリシュタリアだけじゃなくてカドックとも話してみたい」
俺が言うとカドックのあの目付きが今度はこっちに向いた。
「なんで僕がお前のようなつるんでいて特にならない人間と愉快にお話しなければならないんだ？」
「それは……そうだけど……」
「ほら見ろ」
「んもぉー！　カドックったらまたそんな事言っちゃって！　折角今回はマシュちゃんも参加してくれたんだから楽しくやらなきゃねー！」

「ペペロンチーノさんはいつもキリシュタリアのお茶会に参加しているんですか？」
「やぁねぇ！　ペペって気軽に呼んで？　ね！」
グイグイ来るなぁ……。　ふとペペの手を見ると、やはり甲に赤い印。　令呪がある。
その視線に気がついたのかペペが令呪を見せながら話す。
「そんな物欲しそうにしてもだめよ。この令呪は私だけのもの。立香ちゃんにもすぐに契約してくれるいいサーヴァントが現れてくれるわ。　その時に手の甲にちゃあんと令呪が浮かび上がるわ」
「こんなズブの素人と契約してくれるサーヴァントがいればの話だけどな」
??????????
「そうこうしていてお茶会もお開きとなったけどせっかくだからとキリシュタリアがカルデアの中を案内してくれた。　オフェリアさんとマシュもついてきたから四人で適当に話しながらキリシュタリアが各施設や人員の説明をしてくれる。
「ここはメイン電源室。　基本的に立ち入ることはないけどね。そしてあの奥からは生活スペースだ。　全てのスタッフに個室が割り当てられているよ」
「へー。　カルデアってこうして見るとかなり大きいですね？」
「そうね。　カルデアは魔術で空間拡張しているのよ。　外には隠蔽の魔術もかけてあるからあまり出歩かないようにね」
「そうなんですね。　……所で、カルデアってどこにあるんですか？　さっきから窓の外は猛吹雪しか見えなくて」
「先輩。　ここは南極大陸です。　国連が極秘に買い取って時計塔の魔術師が設立した施設がここ、カルデアなんですよ」
「時計塔って？　ロンドンの？」
「そう。見た目はただの時計台だが、中は……そうだな。　例えるなら魔法の学校だな」
「へぇー。　昔読んだ子供向けの小説にも魔法学校があったなぁ。

そうかぁ。　俺も一応魔法使いの端くれってことになるのかな？」
「そもそも、魔法使いではないですよ。　私達は魔術使いであり、魔法使いでは無いんです」
「へ？　そうなの？　魔法と魔術ってどう違うの？」
「それは……おっと。　ここは医務室だ。　ドクターはこの時間ならここにいるだろう。　せっかくだから顔合わせくらいしておこうか」
そう言ってキリシュタリアが医務室のインターホンを押す。
数秒後に出てきたのは長い髪を無造作に後ろで束ねた白衣の男だ。
「ああ、キリシュタリア。　どうしたんだい？　おや？　君は……それに、マシュ？」
「どうも、藤丸立香です」
「なるほど、君が最後のマスターか」
「マスターって言われても自覚とか全然なくて……」
「初めは皆そんなものだよ。　せっかくだから中でお菓子でも食べめるかい？」
さっきお茶したばかりだけど。　まぁ少しなら入るかと思い入ろうとしたら、通路の向こうからキリシュタリアを呼ぶ声が聞こえる。
「ヴォーダイム！　あなた！　今までどこに行っていたの？」
「ああ、すまないね。　オルガマリー。　立香紹介するよ。　ここ、カルデアの所長のオルガマリー・アニムスフィアだ」
「はぁ……どうも、藤丸立香です」
俺が一応の名乗りをするも、オルガマリーと呼ばれた人は俺を無視してキリシュタリアに詰め寄る。
「クリプターの会議が終わったら報告に来なさいっていつも言ってるでしょ？　どうしていつもオフェリアが持ってくるの？　大体いつもいつもあなたがフラフラしているせいで他のチームにも示しが使いないし何より！」
そこで初めて俺を見た。　苛烈と表現しても足りないような目で俺を睨む。
「今日は何!?　こんなボンクラとじゃれついていたって言うの？」

ボンクラ……今日はよく罵倒されるなぁ……。
「オルガマリー。　立香を招き入れたのはここの職員。　引いては君だ。　確かに彼は補欠だが。　レイシフトも出来るはずなんだろう？」
「それよ！　このボンクラ！　レイシフト適正１００パーセントなのよ！」
「本当か？　……それは。　そうだな。　かける言葉が見つからないよ」
キリシュタリアまでもが俺を見てため息を着く。
「あのー。　レイシフトって……何ですか？」
「はぁ!?　さっきの説明会で言ったでしょう？」
「説明会？」
カルデアについてからはずっとマシュやキリシュタリア達と一緒にいたから、そんなものがあった事すら知らない。
「……まさかあなた、説明会サボったなんて言わないわよね？」
威圧感がすごい……。　なんて答えようか。　と思っていたらキリシュタリアが前に出る。
「彼を責めないでくれ。　私が引っ張り回したのが悪かったんだ」
すると、オルガマリー所長は毒気が抜けたような顔になる。
「はぁ……。　まぁいいわ。　なら着いてきなさい。　明日からレイシフト開始だから確認もしたいし」
そうしてオルガマリーを先頭に、俺。　マシュ。　キリシュタリア。　オフェリアの五人でレイシフト部屋に向かった。
??????????
所長がパスワードを入力し、扉を開けると機械の駆動音が鈍く響き、冷蔵庫のような冷気が流れ出る。
「寒っ！　なんでこんな寒いんですか？」
「レイシフトをする用のコフィンは稼働するとかなり熱くなるから、冷房は二十四時間体制で警備も万全よ。　ロックの解除ナンバーを知っているのは私と、私の右腕のレフだけ」
レフ。　その名を聞くと心がざわめくのは何でなんだろう？　キ

リシュタリアもやはり表情が強ばる。
「このコフィンは特別性よ。　全員分特注で作ってあるのよ。　勿論あんたなんかには勿体ないけどね」
と、所長がコフィンの説明をしていると外から足音が。　振り返るとそこに居たのはレフだった！
「レフ！」
「教授……」
「あら！　レフ！　来ていたのね？　丁度この新米マスターにコフィンとレイシフトの説明をしていたのよ」
オルガマリーがレフに駆け寄る。　思わず制止しようとするが間に合わない。いや、そもそも何故レフ・ライノールと言う男をここまで警戒するんだ？
「いや何、レイシフト室が開いているから少し気になってね。　所で、ロマンはどこだい？　用があるんだが」
「ロマン？　ああ、あいつがいると空気が緩むから立ち入り禁止にしているのよ」
「それはいけない。　彼はなんだかんだやる男だよ。　私のお墨付きと言う事で立ち入りを許可してはくれないだろうか？」
「まぁ、あなたがそこまで言うなら……」
「なら、今すぐ彼を呼ぼう。　彼はあまりここに明るくないんだろう？　なら、明日に備えてロマンにもここを見学させておいた方がいいだろう？」
「そ、そうね。　あなたが言うなら間違いないわ。　レフ」
そう言って手持ちの端末を操作する。
「さて、私は君たちと話がしたかったのだよ。　ヴォーダイム。藤丸君」
そう言って俺達の前にやってくる。　思わず一歩下がりそうになるが、レフに腕を掴まれる。
「何をっ!?」
「何も逃げることはないだろう？　少し話をしようじゃないか？最後のマスター？」

腕を掴まれた瞬間分かった。　こいつは人間じゃ無い！　根拠はないけど、キリシュタリア達とは気配の質が違う。　クリプター達も人間離れしているけど、こいつは人間から離れているじゃくて化け物に近いの部類だ！

「……っ！　離せ！」

ようやく振り払い、レフを睨みつけるとキリシュタリアも俺のそばに着く。

「酷いな藤丸君。　そこまで邪険に扱われる謂われはないと思うがね？」

「どうだろうね。　あんたは信用出来ない」

「先輩？　どうしたんですか？　レフ教授はオルガマリー所長が唯一信用するお方ですよ？　勿論。　私も全幅の信頼を置いて……」

「マシュ、こっちに来るんだ！　下がれ！」

マシュの腕を握りこちらに引き戻すと、右手が焼けるように痛む。

「ぐっ!?　腕……が!?」

「……困ったな。　君もマスターに目覚めてしまったか」

「……レフ？」

所長が不振そうにレフによろうとする。

「失礼しまー……って、ええ!?　何だいこれは!?　何があったんだ!?ヴォーダイム君？　これはいったい……？」

「話は後ですドクター！　所長とマシュを連れて退避を！　オフェリア！　クリプター達に連絡を……！」

「遅い！」

レフが叫び、文字通りに膨張する！

人間の殻を破り、本来の姿を取り戻そうとするが、人間の様な形をした肉塊の時点で止まる。

「何!?　……ぐ！　これは……魔眼……か!?」

「オフェリア！」

「もって数分です！　早く！」

オフェリアさんが眼帯を外しその下の右目でレフを睨みつけてい

る。　その目は普通それではなく宝石の煌めきを放っている。
「分かった！　所長。　マシュ。　早くこっちへ！」
「は、はい！　先輩も！」
「逃がすかぁ!!!」
肉塊が蠢き、俺達と所長達を分断する。
「くそっ！」
「オフェリア！　セイバーを！」
「無理です！　魔眼への魔力を少しでも削ったらすぐに動き出します！」
「く……ならば！」
キリシュタリアが右手を構える。　カドックがさっきサーヴァントを召喚した時と同じ！
「来てくれ！　ランサー！」
キリシュタリアの令呪が光り、　白い甲冑に身を包んだ巨大な槍を持った白髪の女性が現れる。
「ランサー、命令により推参した！　で、キリシュタリア！　なんだよこいつ!?」
「レフ教授だ。　いや、レフ教授だったものかな？」
「こいつをやればいいのか？」
「ああ、頼む」
「笑止!?　たかがサーヴァント一匹程度で私が止まるとでも!?」
「ほざけ！　化け物！」
そこから先は到底目で追えるスピードでは無かった。　白銀と淀んだピンクの線が飛び回る。
「速い！」
「くっ……ダメだ！　立香！　逃げろ！」
「えっ？」
俺が疑問の声を上げた瞬間、ランサーと呼ばれたサーヴァントが壁まで吹き飛び、ずるずると力なく崩れ落ちる。
「そんな……!?　キリシュタリアのサーヴァントが!?」
「オフェリア！」

「だめ……です！」
レフが少しずつ膨らんで巨大化していく。
「立香！　逃げるんだ！　早く！」
「でも！　キリシュタリアとオフェリアさんが！」
「私達はいい！　早く！　……ランサー!!」
キリシュタリアが叫ぶと再び令呪が光る。　すると再びランサーが起き上がり槍を構える。
「やってやるよ！　くそがあああああああああ！」
ランサーの槍から炎が上がり、鳥の形をとる。
「くらいやがれ化け物おおおおおおお！」
「ほざけ使い魔ああああああああああ！」
レフの一撃とランサーの炎が衝突し、部屋が爆発する。
??意識を失っていたのは数秒だろうか……？
警報が鳴り響くなら目を覚ますとレイシフト室が燃え上がっていた。
「ぐ……くそ、キリシュタリア！　大丈夫？」
「ああ……大丈夫……だ。　しかし、ランサーが……」
見るとキリシュタリアの白いマントには赤黒い染みが浮かび上がっている。
「キリシュタリア！　血が！」
「致命傷ではない……オフェリアは？」
「私も大丈夫です。　事象のピン留めもしました。　ですが……」
レフの動きは鈍くなっているけど、確実に大きくなっている。
それにつれて俺の右手の痛みも酷く鋭くなっていく。
「ランサーはだめだ。　霊体化して休ませないと霊核がもたない……。　オフェリア、セイバーは？」
「もう出しています！」
見ればレフの周りを全身を甲冑に身を包んだ長身の男が飛び回っている。
レフは既に人型ではなく柱状になり、目の様なものが見える。

「あれは？」
「私にも分からない。　しかし、オフェリアのサーヴァントだけでは手が足りないようだ。　立香、君のサーヴァントは？」
と言いながら俺を見るが、残念ながら俺にはサーヴァントがいない……。
「ごめん……俺には……サーヴァントを召喚する方法なんて……！
もしかして……!?」
ふと思いついて右手に目を向けると手の甲の痛みが形になる。
キリシュタリアがやったように見様見真似で手をかざす。
何故か、頭にとある言葉が浮かぶ……。　俺の……サーヴァント……。　誰でも良いとまでは行かないけど……。　今この状況を打破して、キリシュタリアとオフェリアさんを助けて、レフを倒すだけの力を持つ誰か！　来てくれ！
「最後のマスターか！　させるかあああああ！」
レフがこちらに攻撃しようとする。　しかし、オフェリアさんのサーヴァントが身を呈して庇ってくれた。
「セイバー！」
「当方は無事。　しかし、これ以上は……」
「ありがとうオフェリアさんのサーヴァント。　後は任せて」
前を見据えて呪文を詠唱する。
素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。
降り立つ風には壁を。
四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。
空間の魔力を感じる。　レフからのような邪悪なものでは無く、透き通るような。　まだ何者にもなっていないような……そんな魔力を。
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する。
魔力による風が吹いてくる。　魔力が実態を持ち始めた証拠だ。
――告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
頭に思い浮かんだのはマシュだった。　彼女は無事だったのだろうか？
誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
マシュの事を無理やり頭から振り払って最後の言葉を繋ぐ！
汝　三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！
目の前の空間に魔法陣が敷かれ、長刀を持った青い服を来た金髪の少女が現れる。
その少女は一振でこちらに迫り来るレフを吹き飛ばす。　そして、こちらを振り向く。
「問おう。貴方が、私のマスターか」
レイシフト室の赤い炎と対比する様にどこまでも青い服に炎の光を受けて煌めく金髪。　その碧眼はどこまでも強く前を見据えている。
これが俺と俺のサーヴァントとの最初の出会いだった。

出会いと始まり

「問おう。貴方が、私のマスターか」
そう言いながら俺の目の前に現れたのは青い服をきた金髪が煌めく少女だった。
「……ああ、そうだ。　俺は藤丸立香。　君は？」
「私は……いえ、今はそれどこらでは無いようですね」
そう言ってレフに向けて剣を……？　構えた俺のサーヴァントの手には何も握られていない。　でも彼女の構えは多分剣を持っているソレに近い。
「行きます！」
次の瞬間にはレフの体が吹き飛んだ。　次々と青い線が飛び回りレフの体が抉れていく。
「速っ！　凄い！　これなら……！」
俺が興奮して叫ぶも、キリシュタリアは苦そうな顔だ。
「いや……まだだ。　奴の肉体は再生している。　一撃で仕留めなければ……。　オフェリア、君のサーヴァント。　宝具は？」
「ダメです……！　先の魔眼に魔力を使いすぎて現状維持にしか魔力を回せません！」
「く……」
「キリシュタリア、宝具って？」
俺がキリシュタリアに尋ねると、キリシュタリアが令呪を見せながら答える。
「令呪が我々マスターにとっての切り札なら、宝具はサーヴァントにとっての切り札だ。　サーヴァントは生前、所謂聖剣。　魔剣の類いや、生前の逸話を己のあり方とまで昇華させたものがある。　それが宝具だよ。　有り体に言ってしまえば必殺技だね。　本来の聖杯戦争だとそれがサーヴァントの正体を探る手がかりとなるんだけど、今回はそういう心配は無いだろうね」
と、キリシュタリアが説明してくれている内に、再びレフが叫びながら膨張した。

「不味い！　セイバー！」
オフェリアさんが叫び、令呪を構える。　令呪が赤く光り輝き、オフェリアさんのサーヴァントから魔力が迸る。
「了解した！　マスター！」
セイバーと呼ばれたサーヴァントが持っている棒状の剣を構える。
「宝具……展開！」
しかし、その魔剣が放たれる寸前に、レフが目玉から光線を放ちセイバーを吹き飛ばす。
「ぐ、ぐおおおおおお！」
光線とセイバーの宝具がぶつかり合い魔力と物理が混じりあった爆発が起こる。
「セイバー！」
「ダメだ！　オフェリア！　前に出るな！」
キリシュタリアがオフェリアさんの腕を掴み制止する。
爆発が収まるとセイバーの体が半透明になり倒れている。
「セイバー！」
「ぐっ……。　不覚……。　マスター、すまない……」
そう言い残して光に包まれて消えた。
「そんな……死んだ？」
「いや、もう死んでいるから死んだは正しくない。　また再び呼び出す事は出来るが、暫くは無理だろう。　残るサーヴァントは立香の正体不明のサーヴァントのみ」
俺のサーヴァントは攻撃を食らうことなく高速で動き回り、恐らく斬撃を打ち込んではいるが、レフの体は切り刻まれてもジワジワとその傷口がくっつき再生し始めている。
「俺のサーヴァントの攻撃だけじゃダメなのか……？」
「今までの攻撃だけならぱそうだろうな……」
「つまり……。　宝具しだいって事？」
「ああ、君のサーヴァントの宝具が大型の敵や複数の敵を殲滅出来る宝具ならあるいは……。　しかし、今それを聞くことは無理だろうしこちらから無理に発動させようとすると好きが出来てサーヴァン

トがやられてしまうかもしれない」
でも……こちらから宝具の指示を出さないといつかジリ貧になる……！
「立香。　君に私の魔力を渡す。　令呪と私の魔力ブーストさえあれば、君のサーヴァントに命令をした瞬間に宝具は発動させられるだろう。　オフェリア、君は宝具発動のタイミングに合わせて再び魔眼でサポートを」
「はい。　恐らく私の残存魔力で奴の動きを止められるのはあと一回でしょう」
キリシュタリアの令呪が光り、俺の体に魔力が注がれる感覚がある。
「うわっ……熱!?　痛っ!?」
「君の魔力回路ではあまり長い間私の魔力を保持出来ないのだろう。　発動は出来る限り早く頼む」
「……ああ、任せろ！」
そう言って令呪を構える。
しかし、レフと俺のサーヴァントの戦いは拮抗し、レフの攻撃を避け、懐に飛び込んで切り裂き、再生するを無限ループさせている。所々で爆発を避けきれず負傷していく。
（くっそ……！　いつ打てばいい!?　こうしている内にも……サーヴァントが！）
いっそたった今闇雲にでも打ってしまおうかと思ってしまうが、打って外してしまえば終わりの事実がそれを押しとどめる。
「くっそ！　このままじゃ……！」
「焦るな立香！　きっとその時が来る！　それまで……」
「その時っていつだよ！　このままじゃ俺のサーヴァントが……」
そう叫んだ瞬間。　俺のサーヴァントと目が合った気がした。
その目を見た瞬間。　俺の心は決まった。
「分かったよ、キリシュタリア。　隙は必ず来る。　俺のサーヴァントが必ず道を開いてくれる！」
「驚いたな。　もう念話が出来るのかい？」

「いや全然。　でも、あいつの目を見た時。　声が聞こた気がした。『大丈夫だ』って」
「マスターの君が言うなら……信じよう」
少しずつ負傷して行きながらもその目だけは真っ直ぐ前を向いている。自分が俺達を守る。　人理を護る最後の一騎である自覚を持って戦っている。
「いい加減に、堕ちろおおおおおおおお！　羽虫がああああああああ！」
業を煮やして先に動いたのはレフだった。　柱状の体の全ての目が暗く光り、破壊の光線が放たれる。
彼女はそれを真っ向から受け止め、爆発に巻き込まれる。
「灰燼と化せ！　三流サーヴァントがぁ！　」
オフェリアさんはまた飛び出そうとするが、キリシュタリアが止める。
もう俺は心配しない。　あの目を信じるって決めたから。　……だから……来い！
「今です！　マスター！」
だから俺はその声が煙の中から聞こえた瞬間に、持てる全ての令呪とキリシュタリアからの魔力を彼女に注ぎ込んだ！
「オフェリア！　魔眼発動だ！」
キリシュタリアも察知してオフェリアさんに指示を出す。
「令呪を持って命じる！　宝具を持ってレフ・ライノールを倒せ！」
令呪が今までより強く光り、セイバーの傷が瞬時に癒え、彼女の手に持っていた剣が現れる。　青い両刃の西洋剣は、黄金の光を放ち魔力の風が吹き荒れる。
「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。受けるが良い『約束された勝利の剣』！」
まさに必殺。　剣より迸る黄金の光全てを、一振を持って眼前の敵へと打ち込む。
そして、決着は一瞬だった。　光が収まった時にはレフの肉体は一片たりともこの世に残ってはいなかった。

「終わった……のか？」
俺がそう呟くと俺のサーヴァントが寄ってきた。　流石にあの激戦に全力の宝具の後でボロボロだ。
「ええ、初陣にしては少々厳しいものでしたね」
そう言ってボロボロの手を差し伸べる。　俺はしっかりとその手を握り返して改めて挨拶をする事にした。
「助かったよ。　改めて、俺は藤丸立香。　実は、魔術師でも何でもないんだ」
「そうなんですね。　しかし、私を使う技量は確かなものでした」
先程の戦いで見せていた厳しい目つきとは打って変わって年相応の幼さを残した温和な表情となっている。
「改めて自己評価を、私はセイバー。　真名をアルトリア・ペンドラゴン。　ブリテンを統べる王として生き、獅子王の名を冠しています」
アルトリア・ペンドラゴン！　それくらいは魔術師でない俺ですら知っている。
世界一有名な聖剣、エクスカリバーを振るった騎士王アルトリア・ペンドラゴン！
「あれ？　でも……君は……女の子……だよね？」
そう言われたアルトリア・ペンドラゴンは表情を少し曇らせる。
「政治的な関係で男装していたんですよ……」
「あ、悪い……嫌な事聞いてしまったな……」
「いえ、もう気にしてはいませんよ。　マスター」
と、俺達が話している内にドアを激しく叩く音が聞こえた。
「ちょっと！　キリシュタリア！　オフェリア！　中はどうなっているの？」
この声は所長だ。　無事逃げ出せた様だった。
「そうだった……完全に忘れてたけど此処……。　レイシフト室……だったんだよね」
「ああ……だが、おそらくコフィンのほとんどは破壊されてしまっただろうね……。　とにかく。　アルトリア君。悪いが扉を開けて

もらえるか？」
「承知しました」
そう言って剣の一振で歪んだ扉を両断する。
「きゃあ!?　ドアが真っ二つに……って誰？　アナタ!?」
所長はそう言って隣にいるマシュに飛びつく。
「所長、マシュ。　無事だったんですね」
「無事かどうかはこっちのセリフです！　レフ教授は？　この人……いえ、サーヴァントは？」
「それは私が説明しよう。　立香はサーヴァントの召喚と令呪の行使で疲弊している。　医務室へ」
その言葉で自分の疲労を思い出したように体が重くなる。アルトリアが支えてくれなかったらここで突っ伏して倒れてしまっただろう。
「大丈夫ですか？　マスター」
「ああ、助かった」
「召喚!?　どういう事なの？」
「詳しい事は後で、先ずはこのの始末が先です」
なるほど確かに、セイバーの宝具である程度火は消し飛んだけどまだ火は燻っている。
「……そうね、ここは廃棄するしかないかもね」
「そこの辺りも消火活動が終わってからでしょう」
そこで俺はアルトリアとマシュに連れられて医務室に向かう。
??????、その途中で意識が落ちてしまった。
??意識が再び目覚めた時にはアルトリアはいなく、マシュが俺のそばの椅子で船を漕いでいた。
ふと右手を見ると、令呪の一部が薄れてしまっている。
「目が覚めましたか？　藤丸立香」
「うおっ!?　……オフェリアさん？」
マシュの反対側にいたのはオフェリアさんだった。　サイドテーブルを見ると文庫本が数冊置いてあったから恐らくあの後ずっとマ

シュと二人で俺の目覚めを待ってくれていたみたいだ。
「貴方が意識を失ってから十時間以上たっています。　そして、その十時間は世界を大きく変える十時間です」
「どういう事ですか？」
「詳しい話はブリーフィングルームにて、キリシュタリアとオルガマリー所長が話します。　立てますか？」
「なんとか……いてて。　全身が痛いや」
「サーヴァントの召喚や令呪の行使の影響でしょう。　手を貸します」
そう言ってマシュを起こしながら俺に手を差し伸べる。
起きたマシュとオフェリアさんに肩を貸されながらなんとかブリーフィングルームにたどり着く。
「来たわね、藤丸立香。　貴方は十時間ほど寝ていました。　その十時間は世界を……」
「あ、その下りもう聴きました」
「え？　あらそう。　なら話は早いわ。　じゃあ具体的に何が起こったか説明するわ」
所長の話は俺の混乱させるのに十分すぎた。
一つ。　ここ、カルデア以外の世界の全ては滅びてしまった事。
二つ。　過去に世界が滅びた原因となる聖杯がある事。
三つ。　レイシフト技術を使って俺達マスターを過去に転送し、聖杯とそれによって引き起こる異変を探索。　聖杯を回収する事。
四つ。　先の戦闘によってレイシフトに必要なコフィンがほとんど破壊されてしまった事。
……」
「いい？　これが現状よ。　世界を救う事が出来るのはここカルデアのマスターだけよ」
「所長は来ないんですか？」

「指揮官が戦場に出向く訳ないでしょう？　先ずは残ったコフィンは数少ない。　先ずはキリシュタリアをリーダーとしてメンバーを二名選出するわ。　人選はリーダーに一任します」
「ふむ……なら、立香とマシュ・キリエライトを推薦しよう」
キリシュタリアがそう言うと所長が驚いた顔をしてこちらを指指す。
「嘘でしょ？　即決？　それに、何で同じＡチームのメンバーじゃなくてこいつとマシュなの？　マシュはまだ分かるわ！　でも、何でこの新米マスターなの？」
「立香は先の戦闘で十分すぎる活躍を見せたよ。　オフェリアはまだ回復しきっていない。　マシュは立香にかなり懐いているようだしね」
「……キリシュタリアがそう言うなら良いけど……でも」
「大丈夫。　立香のサーヴァントは強力だよ」
「そう。　ならもう何も言わないわ。　二時間後。　キリシュタリア・ヴォーダイム及びサポート二名はここに集合。　レイシフト目標は日本の地方都市。　冬木よ」
以上。　解散と言う所長の号令で会議は終了となった。
俺は会議室を出て直ぐにキリシュタリアを追いかけた。
「キリシュタリア。　少しいいか？」
「構わないよ」
「率直に聞くけど、どうして俺なんだ？　確かに、俺のサーヴァント。　アルトリアは強力だけど。　Ａチームの人達のサーヴァントも勿論強力だろ？」
俺がそう言うと、キリシュタリアはにこやかに答えた。
「所長の手前、ああ言ったが本当に評価してるのは君自身だよ。あの勇敢さ。　初のレイシフト先で必ず役に立つはずさ」
正面からそう言われてはこそばゆい……。
「そこまで言うなら……。　期待しててよ」
「ああ。　じゃあ、二時間後にまた会おう」
キリシュタリアと別れ、自室に戻る。

自室のベットに腰掛けながらアルトリアを呼ぶ。
「アルトリア。　いる？」
すると、何も無い空間からアルトリアが現れる。
「呼びましたか？　マスター？」
「いや……何となく。　話がしたくて」
「そうですね。　私もマスターの事が知りたいです」
「えっと、そのマスターっの辞めないか？　こそばゆくて」
「なるほど……では、立香と呼んでも？」
「ああ、そうしてくれ。　君の事はどう呼んだらいい？　本当の聖杯戦争だとセイバーって呼んだ方がいいんだろ？」
「本来ならそう呼ばれるべきでしょうが、カルデアにはかなりのサーヴァントがいるはずです。　なので今回は私の事は好きに呼んでくれて構いませんよ」
「そうか……ならアルトリアって呼ばせてもらうよ」
「分かりました」
そうしてセイバー改めアルトリアとキチンと顔合わせを済ませ、レイシフト室へと向かう。　レイシフト室は一応片付けられ、生き残っているコフィンが数基残されていてこざっぱりしている。
レイシフト室にはドクターロマンとオルガマリー所長。　そしてかなり芸術的な服装をしている。　女性がいた。　見た目は中学の芸術の授業中に見たモナ・リザによく似ている。
「藤丸立香。　集合しました。　で、その女性は？」
「よく聞いてくれたね！　４８番目のマスター！　私こそが万能の天才！　レオナルド・ダ・ヴィンチだとも！」
……は？　レオナルド・ダ・ヴィンチ？　あのモナ・リザ描いた？　でも……ダ・ヴィンチってオッサンだったような？
「あっはっはっは！　驚いてくれてどうもありがとう！　私はサーヴァントだよ。　実験第三号！　カルデアによるまともな召喚成功例だよ！」
な、なるほど……確かに歴史的な偉人がサーヴァントになるなら、戦士だけじゃなくて芸術家とかもサーヴァントになる訳か……。

「君は聞いたところ令呪を消費してしまってるようだね。　装填してあげるよ」
ダ・ヴィンチが手をかざすと掠れていた部分が再び赤く浮かび上がった。
「凄い！　ありがとうございます！　レオナルド・ダ・ヴィンチさん！」
「私の事は親愛をもってダヴィンチちゃんと呼んでくれたまえ！」
「な、なるほど……」
「さて、私が最後かな？」
キリシュタリアも遅れて来て、これでレイシフトメンバーは全員揃った。
キリシュタリアも令呪を装填して万全の状態になってコフィンに乗り込む。
心臓の音がうるさい……一応所長から手順は説明してくれている貰ったし。　そもそも俺はキリシュタリアのサポートだから……。
なんて事考えている内にレイシフトが始まった。　体が中に浮き、世界から切り離される感覚だ。
そして暗くも眩い光の輪を通り、レイシフト。　時間旅行が始まった。

第零特異点　邂逅

目を開けるよりも先に鼻に着く匂いでレイシフトの成功を悟った。
だが、臭うのはとても気分の良くなるようなものでは無かった。
物が焼ける煤臭さ。　錆びた鉄のような臭い。
そして焼け付くような熱さ！　また炎か！
「あっつ……あ！　マシュ!?　キリシュタリア!?」
俺が二人を探して叫ぶとすぐ近くから声が聞こえた。
「マシュ・キリエライト、ここにいます！」
「ああ、私もいるよ。　これで全員だな」
キリシュタリアが手持ちの端末を操作すると空中にディスプレイらしき物が浮かんで所長の顔が浮かぶ。
「うぉっ！　凄いなこれ」
「ああ、私は詳しく無いが世界でも公表されていない最先端の技術らしい。　実は、カルデアのパトロンには国連もいるんだよ」
「国連!?　ホントなのか!?」
「ああ。　と、無駄話はここくらいだな。　オルガマリー。　キリシュタリア含め三人。　無事にレイシフト成功した」
「よかった。先ずは霊脈を発見しなさい。　いかにあなた達とはいえ自前の魔力だけではサーヴァントの維持は厳しいわ。　霊脈さえあればこちらから魔力や物資を送ることが出来るわ」
「分かった。　霊脈のポイントを転送してくれ」
??????????
……よし、霊脈と接続完了っと」
「これでカルデアからの魔力でサーヴァントを呼び出せるようになるな。　よし、来い！　ランサー！」
キリシュタリアが令呪をかざしてサーヴァントを呼び出す。
……よし、俺も！
「来てくれ！　アルトリア！」
令呪の導きによってこの時代でも無事にアルトリアを召喚できた。
「来てくれてありがとう。　アルトリア」

「いえ、私は立香のサーヴァントですから」
「……失礼、少しいいかな？　立香」
キリシュタリアが俺を呼ぶ。
「ん？　どうしたの？　キリシュタリア」
「君は……サーヴァントを真名呼びしているのかい？」
「ああ、良くないのは分かっているけど……。　セイバーとかランサーって呼ぶのはなんか良くない気がして……」
「なるほど……それは一理ある。　やはり君は面白い。　我々の常識など意に介せずサーヴァントと接する才能。　やはり君を選んで正解のようだよ」
「そういうものなのか？　所で、キリシュタリアのサーヴァントの真名は？」
「……ランサー」
キリシュタリアがランサーに聞く。　ランサーは無言で頷く。
「俺はギリシャの英霊。　真名をカイニスだ」
「……あー。　ごめん……その……」
「知らないんだろ？　ま、気にはしないさ」
俺が気まずそうにしているとカイニスと名乗った方からフォローしてくれた。
「……ごめん」
「良いって。　ま、戦場での俺の動きを見れば惚れ込むさ」
と、心強い事を言ってくれる。
「まぁ、作戦中はクラス名で呼んだ方が良いかもしれないな。　敵に真名がバレてしまえば弱点を突かれる可能性がある」
「そうなのか……ならレイシフト中はセイバーって呼ぶ事にしていいか？」
俺がアルトリアを振り向きながら呼ぶと。　アルトリアも首肯してくれる。
「よし。　で、俺達は今から何をすればいいんだ？」
「ふむ、先ずははぐれサーヴァントを探そう」
「はぐれサーヴァント？」

聞きなれない単語に首を傾げる。
「ああ、今回の異変は間違いなく高純度の魔力の塊。　聖杯によって引き起こされているものだ。　基本的に聖杯はただの道具であり、手にした者の願いがどんな物であれ叶えてしまう物だが、それによって世界が崩壊するような願いだったらそれに対する抑止力。　カウンターの様な物として聖杯が自分をマスターの様なものとしてサーヴァントを召喚するのさ。　聖杯による異変を解決すると言う目的が同じだから、出会う事さえ出来ればきっと力になるだろうね」
「なるほど……なら、最初ははぐれサーヴァントを探す所から始めようか。　マシュとセイバーもそれでいいか？　ん？　セイバー？　マシュがどうかしたのか？　じっと見つめて」
「……いえ、なんでもありません。　少し、知り合いに似ていたので」
「えっと……私はアルト……セイバーさんとは面識が無いはずですけど……」
「いえ、きっと気のせいでしょう。　あと、サーヴァントを探すと言う作戦は賛成です。　私も、ランサーも前衛でしょうから、アーチャーかキャスター辺りの後衛が欲しいところですね」
贅沢は言えないでしょうねと言いながらアルトリアは歩き出す。
「所で、キリシュタリア。　サーヴァントのクラスってどのくらいあるんだ？」
と、俺が聞いたら、キリシュタリアも歩きながら答えてくれた。
「ああ、基本は七種類だよ。
騎士のセイバー
弓兵のアーチャー
槍兵のランサー
魔術師のキャスター
騎兵のライダー
暗殺者のアサシン
狂戦士のバーサーカー
の七騎だね。　たまにそれ以外のエクストラクラスが召喚される

こともあるらしいけど、めったにないはずだ」
「ありがとう。　詳しいんだな」
「あー。　それくらいら聖杯戦争の基本なんだ」
「あ、そうだったんだ」
「先輩。　もしかして所長から送られた資料読んでいません？」
「あー……。　ああ言うのは苦手で……」
そうこう話していると、街の中心部に近い。　大きな橋の下に着いた。
「サーヴァントがどの辺にいるとか分からないのかなぁ？」
「難しいですね。　遠目の効くアーチャーや、魔術による探知が可能なキャスターならともかく、私達では近距離でしか……！　マスター！　伏せて！」
言うが早いか、アルトリアの声に反応したマシュが俺を押し倒す！
「マシュ！　何をっ！」
その次の瞬間。　元俺の場所を何かが通り過ぎていって壁に刺さった。　見ればナイフの様なもので寸分違わず狙いは俺の首があった場所だ。
「……！」
冷や汗が止まらない……。アルトリアとマシュがいなければ死んでいた……！
「ランサー！」
「ちっ！　ダメだこいつ！　恐らくアサシンだ！　気配遮断のスキルで位置が把握出来ねぇ！」
「マシュ！　物陰に隠れて！　」
「でも！　先輩は!?」
「俺はいいから！　早く！」
「マスター！　右に飛んで！」
アルトリアの警告で右に転がるように飛ぶ。　すると数瞬遅れて俺のいた場所にナイフが突き刺さる。　刺さった角度から見て恐らく移動しながらナイフを投擲している！
「セイバー！」

「ダメです！　私も正確な位置までは……！　それに、私がここから離れるとマスターが危ない……」
くっそ！　さっき話題になったばかりの攻撃を距離が早くも！
「くっそ……！せめてもう一騎サーヴァントがいれば……！」
なん……無い物ねだりをしてるとどこからともなく声が聞こえた。
「サーヴァントを所望かい？　坊主」
「誰!?」
声のした方向に目を向けると青いフードを被り、身の丈程ある杖を手にした男がいる。
「貴方は？」
「自己紹介は後だ！　先ずはあのせこせこした野郎をぶっ飛ばすぞ！」
急に助力に来てくれたサーヴァントは杖から放った光弾を物陰に撃ち込んだ。　光弾が直撃する瞬間、影が飛び出し近くの草むらに飛び込んだのがかすかに見えた！
「セイバー！　そこの草むらだ！」
「はあああああああああ！」
俺が言うと同時にアルトリアが飛び込み、草むらごとサーヴァントを両断する。
「取った！」
肉体を真っ二つにされた敵サーヴァントは一言も発すること無く消えていった。
「やった……のか？」
「ああ、お疲れ様だな。　坊主」
そう言いながら俺の頭に手を置いて乱暴に撫で回す。
「さっきの嬢ちゃんを気遣う根性と言い、てめぇのサーヴァントへの指示と言い悪くねぇな」
「失礼。　貴方ははぐれサーヴァントかな？」
キリシュタリアが声をかける。
「おう、サーヴァント。　キャスター。　真名をクーフーリンだ」
「クーフーリンですか？　あのケルトの大英雄、クランの猛犬と称

されるあの!?」
マシュが興奮気味に詰め寄る。
「おう、本来の適正クラスはランサーなんだが、今回の聖杯戦争はキャスターとしての現界らしいな」
「同じサーヴァントでも違うクラスで召喚される事なんてあるの？」
俺の疑問にはキリシュタリアが答えてくれた。
「ああ、サーヴァントの逸話しだいで複数のクラス適性がある場合もあるんだ。　例えば、世界一有名な英雄と称される事もあるヘラクレスは七騎の内、キャスター以外の適性があると言われている」
「へー。　で、クーフーリンは今回はキャスターだけど、本当はランサーなの？」
「おう。　ま、キャスターが偽物って事じゃ無いんだけどな」
こうして、キャスターのクーフーリンを仲間にして一行は橋を渡り聖杯へと向かった。

覚醒　そして帰還

「キャスター。　橋を渡る前に少しいいかな？」
キリシュタリアがキャスターに呼びかける。
「クーフーリンでいい。　もう敵に俺の名前ばバレちまってる、何だ？　他のサーヴァントの事か？」
「そうだ。　これ以上こちら側につくサーヴァントがいるのか。そして、敵側のサーヴァントの情報が出来るだけ欲しい」
「ああ、どっちの情報も俺の知ってる限りって前提だか教えてやるよ。　まず、こっち側のサーヴァントは俺だけ……。　そもそも、この冬木にまともにサーヴァントとして召喚出来ているのは俺ともう一人たけだ」
「え？　じゃあ、さっきのアサシンは？」
「あれは正しいサーヴァントじゃあねぇ。　サーヴァントのなり損ない。　サーヴァントの影だ」
「シャドウ……サーヴァント……」
「お！　その言い方良いな坊主！　これからあのサーヴァントもどきはシャドウサーヴァントって呼ぶか」
「呼称はさておき。　なら次だな。　敵側のサーヴァントの情報を君の知る限りでいいから教えて欲しい　」
「ああ、いいぜ。　まず。　聖杯の目の前に陣取って動かねぇのがセイバーだ」
「ふむ……最優と称されるセイバーは最後になりそうだね」
「んで、めぼしいのはあと二騎。　アーチャーとバーサーカーだな。それ以外はゾンビだのスケルトンだの竜牙兵だのの雑兵だけだ」
「なるほど……向こうが三騎。　こちらも三騎となると……」
「各個撃破しかないか？」
「ああ。　バーサーカーは恐らくそれで大丈夫だろうが、問題はセイバーとアーチャーだ。　アーチャーの野郎がセイバーがいる洞窟の入口から暇すぎて離れずにいやがる」
「なら、バーサーカーを俺たち三人で戦って後の二人を後回しする

のは？」
「いや、アーチャーの射程距離ならバーサーカーと戦ってる間でも狙撃出来る。　ただでさえ厄介なバーサーカー相手にアーチャーの狙撃が合わさったら俺たち三人でも厳しいだろうな」
「ならやはり三騎同時に戦闘をしかけるしかないか……」
「ああ、んで……誰が何を相手するかって事だがな……」
「私とランサーがバーサーカーを引き受けよう。　その間にキャスター……失礼。　クーフーリンと立香達でアーチャーとセイバーを」
「俺は別に構わないけど……それでいいか？　クーフーリン」
「あー、別にいいっちゃいいけどなぁ……勝てねぇぞ。　坊主のサーヴァントじゃあ」
それを聞いた瞬間。　アルトリアの眉間にシワがよる。
「撤回しろ、クーフーリン。　いかにケルト神話の大英雄と言えど、この剣の侮辱は許さん！」
今にも噛みつきそうな剣幕だが、クーフーリンは何処吹く風だ。
「いやいや。　気を悪くしたなら謝るが、お前を貶した訳じゃあねぇ。　むしろ褒めてるんだぜ？　なんせ……」
クーフーリンがアルトリアを指刺しながら言った。
「なんせ聖杯を守っているセイバーは。　アルトリア・ペンドラゴン??なんだからな！」
??????????
「嘘……だろ？　だって……アルトリアはここに……」
「見間違いと言う可能性は？」
「ないね、俺は昔聖杯戦争でお前とあった事があるんだ。　あの剣さばき、間違えようがねぇよ」
……クーフーリンが嘘を言っているようにも見えない……。　なら本当に相手はあのアルトリア・ペンドラゴンなのか!?
「可能性がない訳では無いよ。　ここにいるクーフーリンのように違うクラスで同時現界すればあるいは」
「いや、あれは紛れもないセイバーだ。　黒化しちまってるが、紛れもなくセイバーのアルトリア・ペンドラゴンだ」

「敵は……私自身」
「おう、敵がお前自身なら力量も同じ。　違うのは……魔力の貯蔵量だな」
魔力……アルトリアは自前の魔力以外に俺を通じてカルデアかれランサー魔力供給を受けている。
「クーフーリン。　こっちのセイバーは俺のサーヴァントだ。
それにカルデアからの魔力のバックアップもある。　それに、令呪だって……　」
「ああ、知ってるぜ。　それを加味して負ける」
何故なら。　と、クーフーリンが続ける。
「向こうには無限に等しい魔力を保持してる聖杯がある。　英霊を七騎プラス俺を呼んで、さらにこの時代を狂わせてまだ余ってやがる」
「そんな……」
「……いえ、手はあります。　そうですよね？　マシュ？」
唐突にアルトリアがマシュを振り向く。
「えっ!?　……私……ですか？」
「ん？　嬢ちゃんが？……いや、待てよ？　……この嬢ちゃん……まさか……!?」
「気づきましたか？　クーフーリン。　彼女は……サーヴァントです。　この冬木に来た瞬間から感じてはいました」
「何だって!?　マシュがサーヴァント!?」
「坊主どころか嬢ちゃん本人ですら気づいてねぇだろうけどな。……思い当たる節はあるか？　嬢ちゃん？」
「……はい。　私は……サーヴァント召喚実験成功例第二号です」
「どういう……意味だ？　マシュ……？」
と、俺が聞く前にクーフーリンとキリシュタリアが俺をマシュを掴んで後ろに下がらせる。
「すまないが話は後だ立香。　このタイミングでバーサーカーが!!」
ビルの屋上を飛びながら現れたのは身長二メートルを優に超える

筋骨隆々の大男だった！
「うぉ!?」
「来やがったな!?　おい！　金髪！　お前のサーヴァントは？」
「もう出している！　ランサー！」
「任せろ！」
声と同時にキリシュタリアの側の空間からカイニスが飛び出し、飛び込みながら切り込んで来たバーサーカーの一撃を受け止める。
「ーーーーーーーーーーーー!!!!」
人と言うより獣に近い咆哮を轟かせカイニスを推し潰そうとする。
「舐めるなあああああ！」
カイニスも負けずと叫びバーサーカーと互角に渡り合う。　一振でビル一棟を吹き飛ばせる一撃をカイニスの左腕の盾で受け、右手の槍を打ち込む。
「立香！　マシュ！　手筈通りに！　行け！」
キリシュタリアの叫びで俺とマシュが走り出す。
「金髪！　強化のルーン魔術をかけとく！　そいつの真名は……だ！」
「……分かった。　なら、尚更あのサーヴァントは私の……。　いや、私達の相手だな」
「ああ、あとは任せな」
それだけ言い残してクーフーリンも飛び立つ。
「はぁっ……はぁっ……！　セイバー！　また来る！」
「はああ！」
死の気配だけをなんとなく察知し、アルトリアにタイミングだけを伝える。　サーヴァントであるセイバーにはそれで十分伝わるらしい。
「見えた！　マスター。　ここからは私だけが！」
「ダメだ！　俺の魔力回路じゃ遠距離まで魔力のパスが通じないんだ！」
「坊主の言った通りだぜ、騎士王サマよ。　アーチャーだけなら兎

も角奥にもう一人いやがるんだぜ？」
「ならどうしろと言うんですか!?」
「簡単さ！　そうら！」
「え!?　何を……!?うわぁ!?」
「先輩！　きゃあ!?」
クーフーリンのルーン魔術で宙を飛び、アーチャーの頭上を飛び越えながら奥にある洞窟へと向かう。
「クーフーリン！　そいつは任せるぞ！」
「ああ！　もとよりそのつもりだ！　コイツとは個人的に因縁がある！　」
そう叫びながら杖でアーチャーに殴りかかった！　アーチャーはア??チャーでどこから取り出したら白黒の双剣で受ける。
??????洞窟の奥には巨大な空間があった。
素人の俺でも分かる……。　空気そのものが震えるレベルの魔力！
「マシュ。　俺の後ろに……」
「いえ、私は大丈夫です」
「……そうか、セイバー。　気をつけろ。　俺でも分かるぞ！　あの奥……いる」
「……ええ、間違いありません！　聖杯を守っているのは、アルトリア・ペンドラゴン！　私自身です！」
剣を地面に突き立て、俺達を阻むように仁王立ちしているサーヴァントの顔は、確かアルトリアと同じだった。　しかし、俺のアルトリアの様な人を慈しむ慈愛の笑顔など浮かべてはいなかった。　正に対局。黒い甲冑に身を包み、形は同じだがこれまた漆黒の聖剣を引き抜きながら俺たちを睨む彼女はアルトリアｉｆの姿。　アルトリア・オルタ
「……貴様らが敵か」
「ああ。　聖杯を回収して、この時代の異変を正す！」
「ふっ。　貴様ら程度で人理の修復など成せるものか？　私が確か

めてやろう」
そう言いながら構えたアルトリアの魔力が急に増幅する。　先程の大気中の魔力など、比較にならない程の魔力がオルタの聖剣に集まる。
「この一撃、防いでみせよ！」
「まずい！　セイバー！」
このままでは死ぬ！　そう直感した俺は即座に令呪を構える。
「令呪を持ってセイバーに命じる！　宝具で対抗せよ！」
「了解しました！　マスター！」
三画ある令呪の内の一画を消費し、アルトリアに魔力を送る。
令呪の魔力供給で瞬時に宝具発動までの魔力をエクスカリバーに充填する。
「その程度で防げるか！　喰らえ！『約束された勝利の剣』！！！！！！」
「くっ！『約束された勝利の剣』！！！！！！」
同じはずのサーヴァント。　同じはずの宝具が激突する。　アルトリアは上段の振り下ろし。　オルタは下段からの切り上げ。　白い光と黒い光。　全てが真反対の光の束は凄まじい衝撃と共に相殺されて消えた。
「……なるほど、令呪を使えばこの程度の威力には対抗できるらしいな。　なら、もう一度だ！」
「あの威力を連続で!?　先輩!!」
「ダメだマシュ！　出るな！　っ!!　セイバー！　令呪を持って命じる！　もう一度宝具を！」
「はい！『約束された勝利の剣』！！！！！！」
再び宝具の激突。　そしてまたしても双方同じ威力。　違いがあるとするならば……。
「……令呪は三画。　残る令呪はあと一画。　どうするつもりだ？」
三度、黒い聖剣から魔力が迸る。
「くっそ！　……令呪を持って……」
俺がやけくそ気味に最後の令呪を使おうと構えると、マシュが急に

俺達の前に飛び出る！
「マシュ!?　ダメだ！　危ない！　戻るんだ！」
「マシュ!?」
「……先輩。　セイバーさん。　私に任せてください！」
そう言いながら俺達とオルタよ間に割って入ったマシュの足は震えている。　それでも顔は背けずに真っ直ぐにオルタを見据えている。
「良い目だ。小娘。　名前を聞こう」
「……マシュ・キリエライトです」
「そうか。　良い名だ。　ならばこの一撃。　受けて見せよ！　卑王鉄槌、極光は反転する。光を飲め！　『　約束された勝利の剣』!!!!!」
オルタの宝具が放たれる。　もう令呪を使ってもアルトリアの宝具は間に合わない！
「マシューーー！」
「……分かるんです。　私の中の英霊が、叫んでいる。　貴方は私の命を救ってくれた。　その守る力を！　お貸しください！」
その瞬間。　マシュの体からアルトリアが現れた時のような強い光が溢れる！
「え？　……これは、サーヴァントが召喚される時の光？」
光の中から現れたのは、身の丈を優に超える大盾を担いだマシュだった。　マシュは腰を低くし、その大盾を真正面に構える。
「……宝具も、真名も分からない未熟者ですけど。　それでも私も……サーヴァントなんです！　はあああああああああああああ！」
振りかぶって地面に盾を突き立てると盾から障壁が現れ、オルタの宝具を受ける。
「ぐっ！　ぐうううううあああああああああああああ！」
喰らえば人間は愚かサーヴァントですら塵すら残らない威力をその身で一身に受け止める。
「マシュ！　……くっそ！　セイバー！　今の内に宝具を」
「……マシュ・キリエライト。　貴方が今その宝具を受け止められ

なければ貴方だけでなく。　立香が死にます。　だから！　耐えて下さい！　貴方なら耐えられる！」
「……アルトリア……さん。　はい！」
その言葉を受けて一際マシュの宝具が光り輝く。
「……後は任せたぞ！　セイバー！　第三の令呪を持って、藤丸立香がアルトリア・ペンドラゴンに命じる！　宝具でアイツを打倒せよ！」
マシュとオルタの光を受けてなお霞まぬ程の光がアルトリアの剣に集まる。
「　束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。受けるが良い！『　約束された勝利の剣』!!!」
その瞬間。　オルタの宝具を受けきり、マシュの宝具も消える。
アルトリアとオルタの間を阻むものは何も無い！
「行けぇぇぇぇ！」
光が、闇を呑み込む。
???????????
「おい、ここまでみたいだな。　弓兵」
「そのようだな。　……ここまでよく持ったよ」
「ほざけ。　……まぁお前もただあの騎士王サマに盲信してる訳じゃあ無かった訳だな」
「勿論だとも。　ケルトの大英雄」
「しかしまぁ、時間切れで勝負無し……か」
「私達はいつもそうだな。　しかし、次会う時は立場が違うだろう。人理の守り手として存在する私だ。　次現界する時は、きっとカルデア側だ」
「そん時に俺がカルデア側とか限らねぇぞ？」
「その時はその時だ。　三度目にして決着を付けよう」
???????????ああ、楽しみだ」
???バーサーカーの野郎が、消えた？」
「立香がやったようだね。　早く私達も聖杯に向かおう」

「ああ」
「……この勝負はどうだった？　ランサー……いや、カイニス」
「どうもこうもねぇよ。　気持ちよく暴れられた。それだけだ」
「そうか、なら良かった」
「ああ、早く行こうぜ。　嫌な予感がする」
??????????
……見事。　人理の守り手よ」
前回とは違い、キリシュタリアの魔力譲渡が無かったからレフの時とは違い。オルタはまだこの世にいる。　しかし、身体中ボロボロでもう戦えそうにない。
「貴様らの勝ちだ。　聖杯は持って行け。　聖杯を回収すればこの時代の異変も解決する。　マシュ・キリエライト。　貴公の盾は良い盾だ。　貴公の心が折れない限り守りたいものを守る不滅不倒の城となるだらう」
「……はい！」
それだけ言い残してオルタも消え去った。　そこに残ったのは魔力による空間の歪みだけだった。
「あそこにあるのが……聖杯？」
「ええ、そのようですね」
「おう、坊主！　嬢ちゃん！　終わったみたいだな！」
「立香！」
「おい！　生きてるか!?」
後ろから声が聞こえ振り返るとクーフーリン。　そしてキリシュタリア達が来ていた。
「ああ、終わったよ」
俺がそう言うと、クーフーリンが満足そうに頷く。　みると、彼の体も透け始めている。
「そりゃあ良かった。　俺はもうこれで終わりだが、縁があればまた会うだろうよ。　そん時はランサーとして呼んでくれや！」
そして、クーフーリンも消え、残ったのは俺達だけどなった。
「さて、聖杯を回収して帰ろうか。　カイニス」

「了解だ。　……待て、あいつは!?」
カイニスが槍で示した方向に、人影が見える。
「っ！　お前は!?　レフ・ライノール!?　どうして!?」
「……あの騎士王は頑固でね。　私に聖杯を渡すくらいならこの世界ごと聖杯を壊すと言っててね。　私でも手が出せなかったんだよ」
「ほーう!?　で？　今更ノコノコ出てきやがって聖杯掻払うつもりか？」
「いや、聖杯の今の所有者は君達だ。　奪い取るには少々時間が足りない」
しかし、とレフが続ける。
「この冬木の土地を修復しただけで何が出来ると言うのかね？　特異点はあと七つ！　貴様らゴミ共ではどうにも出来んのだよ！」
「ほざけ！　あのクソ野郎！　今すぐぶっ殺してやる！」
「ダメだ！　時間が無い！　戦うより先に空間が消滅する。　ドクター！　レイシフトを！」
「わ、分かったよ！」
モニターからロマンの声が聞こえ、崩れ行く都市と、レフの高笑いを??????? 最後に、レイシフトで俺達は現代に戻った。
??????? 目を覚まし、コフィンから出ると、ダヴィンチちゃんが迎えてくれた。
「はーい。　色々と話はあるだろうけど、まずはお疲れ様と言わせておくれ。三人とも、本当によくやってくれたよ　」
カイニスから聖杯を受け取りながら言う。
「兎に角。　今は休みたまえ」
マシュの事。　レフの事。　色々聞きたいけど、これ以上は体が持ちそうにない。　令呪を連続で行使した事で体がボロボロだ。
見ればキリシュタリアの令呪も一画減っていた。　バーサーカーを一人で食い止めてくれていた事に礼を言うと、向こうも素直に受け取??????? てくれて、俺達の戦いを賛辞してくれた。

自室に戻り、ベットに倒れ込む。　睡魔と懸命に戦いながらアルトリアを呼ぶ。
「アルトリア、いいか？」
「なんです？　立香」
「とりあえず、今日はありがとうな。　助かったよ」
「ありがとうございます。　次も任せてください」
「……あの黒いアルトリア。　あれば何だったんだ？」
「私にも分かりません。　兎に角。今日は休んで下さい。全てはそれからです」
そう言いながらアルトリアが俺に布団をかけてくれた。　それが決め手になって瞼が閉じる。
（色々と考える事もある。　今回の戦闘で俺は何の役にも立たなかった。　もっと強くならないと！）
その決意を胸に俺は眠りについた。

幕間の物語

冬木から帰還して数日。　全職員に渡された端末にダヴィンチちゃんから連絡が来る。

『　キリシュタリア・ヴォーダイム。　藤丸立香両名は会議室に集合』

何の話だろうと思いながら会議室に行くと、キリシュタリアはもう到着しており、ドクターロマンとオルガマリー、そしてダヴィンチちゃんがいた。

「やあ！　待っていたよ。　立香君！」

「遅い！」

「来たね、立香。　どうやらダヴィンチ女史が話があるらしい」

「はあ……ダヴィンチちゃん。　話って？」

と俺が聞くとダヴィンチちゃんがその言葉を待っていたと言わんばかりの笑顔で説明する。

「実はね！　以前、レフの襲撃で壊れてしまっていたカルデアの召喚術式。　及びその設備の復旧が終わってね、英霊を召喚できるようになったんだよ！」

英霊を召喚！　アルトリアやキリシュタリアのカイニスの様にサーヴァントが仲間になるのか！

「凄いじゃないですか！　早速召喚しましょうよ！」

「それがねぇ、サーヴァントの召喚にはもう一手間いるんだよ」

「一手間？」

「うん。　サーヴァントの召喚には令呪さえあれば最低限出来るけど、狙ったサーヴァントを召喚するには触媒か、そのサーヴァントとの繋がり、『縁』が必要なんだよ」

「へー」

触媒か、縁……。　アルトリアで言えばエクスカリバーとかがあれば行けるのかな？

「で、カルデアには触媒なんて無く、外の世界は滅びてしまって触媒を取りに行けない。　つまり、冬木の土地でサーヴァントと縁を結ん

だ君達二人でサーヴァントを呼んで欲しいわけだ」
「なるほど……。　あれ？　マシュはいなくていいんですか？」
と、俺が聞くとそれにはオルガマリーが答える。
「マシュはデミサーヴァントだからよ。　マシュ自身も魔力を消費する上に、サーヴァントに魔力を回すなんて出来ないのよ」
相変わらずキツい視線で睨まれる。　確かに出会いの印象は最悪だったけどそこまで嫌われるかなぁ……。
「兎に角！　さっさとサーヴァントを召喚して戦力の増強をしよう！」
と、ダヴィンチちゃんに急かされ、俺とキリシュタリアの二人で令呪を構えて召喚の呪文を詠唱する。
「「抑止の輪より来たれ　天秤の守り手よ！」」
光の輪が収束し、目を開けられないほどの光が収まった時に現れたのは青いフードを被り、身の丈程の杖を担いだ。　あの時見たサーヴァントだった。
「サーヴァント。　クーフーリン。　今回はキャスターでの限界か……。　と、坊主じゃねぇか！」
と、いきなり俺の背中をバシバシと音が鳴る強さで叩く。
「痛い痛い痛い！　痛いよクーフーリン！」
「なんだよ、寂しいなぁ。　さて、召喚された意味は分かってるぜ。人理を守るために、お仕事といきますかね」
こうして、カルデア召喚実験は無事成功し、これを皮切りに他のマスター達へ召喚を初めて行く目処がたった。
???????????
「ああ、今終わって解散した所だ。　何か用かな？」
「マシュとキリシュタリアを誘ってお茶でもしようと思って。　時間はある？」
俺がそう提案するとキリシュタリアは破顔する。
「勿論だとも。　マシュは別メニューでまだ時間がかかるから、先に準備だけしておこう」

「ああ。　でも、三人だけってのも寂しいよな……」
「……ふむ。　なら、カドック！　君もどうだい？」
声をかけられたカドックは心底嫌そうな顔をする。
「何で僕が君のようなエリートとコイツみたいなボンクラと仲良くお茶をしなくてはいけないんだ？」
「いや、これは命令だよ。　カドック・ゼルムプス。　次回の特異点が判明した。　メンバーは私と立香。　そして君だよ」
「はぁ!?　……何で僕を!?」
「冬木での活動で分かった。　私のカイニスと立香のアルトリア。　そしてマシュがいれば前衛は十分果たせる。　しかし、アーチャーやキャスターの様な後衛が必要なんだ」
「それならぺぺでいいだろ？」
「いや……ぺぺのアーチャーは……。　なんというか……」
「まぁ……それもそうだけど……」
「既にオルガマリーに許可はもらってるよ。　さあ、親睦を深めるためにお茶でもどうだい？　カドック？」
「……。　ああ、分かったよ」
そうして合流したマシュも合わせて四人でテーブルを囲むことになった。
……気まずい。　キリシュタリアとマシュは和やかに話しているけど、カドックが相変わらず俺に睨みつけている。
「……なんだよ」
「いや、えっと……そういえば！　カドックのサーヴァントはどんなのなんだ？」
そう、彼もマスターならサーヴァントを持っており、自分のサーヴァントに自信を持っているだろう。　そこから会話を続けて……
「はぁ？　僕のサーヴァントをキャスターと知って、セイバーのマスターの君が聞くのかい？　それともそれはエリート流の嫌味かい？　悪いねぇ、生憎凡人の僕にそういう皮肉が伝わらなくてねぇ」
「……なんだよその言い方！　大体俺がエリートなんて……」
「三騎士を召喚出来てまともに使えているんだろう？　その時点で

エリートの証明じゃないか！」
「カドック。　そんな言い方は感心しないわ。　まるで私が弱いみたいな言い方じゃないの。　あなたは狙ってキャスターを引き当てたんでしょう？」
そう言いながら虚空から現れたのは銀髪を腰まで伸ばした少女だった。　この子がカドックのサーヴァント。　キャスター
「えっと……。　君がカドックのサーヴァントだよね？　よろしく」
「ええ、よろしくお願いするわ。　セイバーのマスター。　藤丸立香」
「あれ？　俺、君に名乗ったっけ？」
「いいえ、でもカドックが……」
「自己紹介はもう良いだろう？　キャスター」
「……カドックがあなたのこと話していたのよ」
俺の事を？　そう思っていたらカドックがものすごい形相で俺に睨んだ。
「それを言うな！　それにこいつだけじゃない！　僕はサーヴァントの召喚に成功したマスター全員の特徴をまとめているだけだ！」
それさり気に凄くないか？
「カドックさんはミーティング後もいつも資料を見ていますし、トレーニングもいつも居残りで自主練していますよね」
「ああ、カドックの情報量は正直私以上だ。　その意味でも立香と相性が良さそうだと判断した」
マシュとキリシュタリアの援護もあり、諦めたように紅茶を呷る。
「……僕はＡチームの中じゃあ一番弱いマスターなんだ。　魔力量も、回路も……。　だから自力で消費魔力量が一番少ない後衛支援のキャスターを選んだ。　そして僕はこのキャスターと共にゼムルプス家を大きくしてみせる」
「ゼムルプス家？」
「立香。　魔術師において家柄というのは何よりも大切と言っても過言ではないんだよ」

キリシュタリアが袖を捲ると、腕に令呪とは別の青緑に光る模様が浮かび上がっている。
「これが魔術刻印。　魔術師は代々これを下の代に強く濃くしながら受け継がせるものなんだよ」
「ああ、そして僕の家系は魔術師としての歴史が浅い。　だから皆僕を下に見る。　だが！　僕はこのグランドオーダーでゼムルプス家の名を上げてみせるんだ！」
卑屈に薄汚れた瞳の奥に、確固たる信念の光が見える。
「そのために僕みたいな凡人は努力し続けるしかないんだよ」
「……月並みな言葉だけど、努力し続けられるのも才能だと思うよ。カドック」
心の底からの言葉のはずだった。　しかし、カドックには届かずお茶会はお開きとなった。
「立香。　それでもメンバーは変える気は無い。　君たちの事もあるけどコフィンの調整等もある」
「大丈夫だよ、キリシュタリア。　カドックは悪いやつじゃない。きっと上手くやれるよ」
と俺たちが話していたら後ろから急に声が掛かる。　さっきのお茶会でも聞いた氷のように冷たく透き通っている声。
「こうして改めて話すのは始めてね。　私はカドックのサーヴァント。　キャスターよ。　真名はカドックの言いつけで話せないわ、許して頂戴」
声のイメージは氷のような鋭さを感じたけど話し方や顔立ちはキツそうなイメージは感じられなかった。
「ああ、改めてよろしく。　キャスター」
俺が手を差し出すと、その手をマジマジと見つめてくる。
「えっと……キャスター？」
「ああ、ごめんなさいね。　ここまで無防備なマスターも珍しいから」
「え？　どういう……」
……これ以上喋っていたら喉元の氷が刺さっていただろう。　キ

リシュタリアもアルトリアも殺気をまるで感じられなかったようで、咄嗟のことに対処出来ていない。
「キャスター？」
「ごめんなさいね。　脅すつもりは無かったのだけど、カドックがあのエリートがどのくらいか見極めてこいって言うから。　殺す気はなかったのよ？　本当よ」
クスクスと見た目の年相応の笑顔を見せる。
「いや、気にしてはないよ。　ありがとう」
「ありがとう？　どういう意味かしら？」
キャスターが眉を顰める。
「これが実践だったら俺はもう死んでいる。　だけどこうして知っておくことで次はもう少し足掻けるかもしれない。　魔術回路が無いに等しい俺はアルトリアに魔力を通す為には物理的距離が近くないといけないらしいんだ。　だからこういう死が一番近いマスターは俺だろう。　だからそういう事を教えてくれてありがとうって事」
俺がそう言うと、珍獣を見るような目でキャスターが俺を見る。
「……ふぅん。　貴方、カドックの思っている以上に面白いかもね」
キャスターの唐突な訪問をもって、改めてお茶会は解散となった。
「アルトリア、俺に剣を教えて欲しい」
「……マスター急にどうしたのですか？」
戦闘シュミレーション室でアルトリアを呼び出して模造刀を構える。
「いやさ、俺はマスターとしては未熟だから最前線で魔力供給をしなきゃ行けないわけじゃないか？　だから全線に出てもサーヴァントは無理でもせめてただの魔獣とか亡者相手くらいなら生き残れるくらいにはならないとなーって思って」
俺がそう言うとアルトリアは納得はしたが許容はできないと言うような表情を見せる。
「確かに最低限の心得はあっても困ることは無さそうですが……。立香、貴方は何かあったら私を庇いに飛び込んできそうで怖いので

すよ」
うっ……。　少し見透かされた気分だ。　俺の動揺をアルトリアは見逃さない。
「その反応はやはりその覚悟はあったようですね。　私達サーヴァントは例え体が滅びてもカルデアからの魔力供給さえあれば再び肉体を構成出来るのですから。　間違っても私を庇って傷をおうようなことはしないでくださいね」
「あ、ああ。　分かったよ。　でも、やっぱり俺が全然にいることはかわりないんだから、少しくらい戦えてもいいだろ？　邪魔にはならないくらいにさ」
と、俺が食い下がったらアルトリアが諦めたように構える。
「……はぁ、分かりましたよ。　これから私があなたに攻撃を加えます。　これからするのは致命傷を負うような攻撃ばかりです。防げ、とは言いません。　知ってください。　知っていれば少しは対処出来るものですから。　いいですか？　いざ！」
そう言ってアルトリアが目の前から消えた！　いや、消えたと錯覚するような速度で俺の右に回る。　咄嗟に振り向いてもそこに見えるのはエクスカリバーの剣先だった。
「はい、これが敵サーヴァントとの戦闘でしたら立香。　あなたはもう死にました。　その時間一秒未満。　マシュが以下に優れたが盾兵でも流石に守りきれないでしょう」
流石に厳しい。　でも、俺はここで諦める訳には行かないんだ！
「もう一本！」
「良いでしょう。　行きますよ！」
そうして、アルトリアとの特訓は第一特異点へのレイシフトの前日まで及んだ。
??????????
レイシフト当日。　キリシュタリアを先頭に俺、マシュ。　そしてカドックが揃った。
「分かっているわね、これからが本当の人理修復よ」
オルガマリー所長が緊張したような面持ちで告げる。　それぞれ

がコフィンに入り込む最後まで所長は俺たちから目を離そうとしなかった。
「分かっているわね？　向こうに着いたら先ずは全員合流して、霊脈の発見が最優先だからね」
事前に知らされているマニュアルの再確認をする。
「じゃあレイシフト。　開始するよ」
ドクターロマンの掛け声とともに体から意識が抜けていく感覚と共に目の前が加速する。
??????????
目を開けると、草原に立ち尽くしていた。　すぐ近くにはマシュの姿もある。　マシュもサーヴァントの出で立ちになっており、大盾を杖代わりにして立っている。
「マシュ」
「はい、マスター。　マシュ・キリエライト。　……そして、着いてきてしまったフォウさん両名レイシフト成功です」
見ると、フォウ君もマシュの傍で当たりをキョロキョロ見渡している。
「フォウ君。　着いてきちゃったの？」
「フォーウ！」
まぁ、着いてきてしまったものはしょうがないか。　そう思っていたらキリシュタリアから連絡が入る。
「立香、マシュ無事か？」
「キリシュタリア！　こっちは無事だ」
「そうか、カドックもこちらにいる。　どうやらお互いの座標がズレてしまったらしいな。　距離はおよそ三キロって所か」
「どうする？　先ずは合流するんだろ？」
「ああ。　よし、合流ポイントを送る。　そこで落ち合おう」
そう言って通信は切れてしまった。　カルデアに通信を繋げると、無事に連絡は届き現在の状況を伝える。
一つ、空に謎の光輪があること
一つ、時代測定からここは１４３１年。　百年戦争。　場所はオル

レアン周辺。
一つ、空を舞う龍。　正式にはドラゴンではなくなりそこないのワイバーンらしいが。　ともかく、現実にありえない生物が空を闊歩している事。
「よし、先ずはキリシュタリア達と合流しよう」
一言そう言ってマシュと共に人理修復の最初の一歩を踏み出した。

第一特異点　聖女と竜の邂逅

レイシフトでの軽い酩酊感が覚め、まぶたの向こうからカルデアでは感じる事の出来ない強い光を受ける。

目を開けるとそこは果ての見えない平原だった。　頭では理解していたが、魔術師でもない俺にこの現象を説明する言葉は一つしかない『タイムスリップ』と。

「せんぱ……いえ、マスター。　大丈夫ですか？」

隣から戦闘用になって身の丈を超える大盾を持った俺の相棒にしてサーヴァント。　マシュの声が聞こえる。

「ああ、俺は大丈夫。　……なんかフォウ君もいるけど」

白い毛をモフモフさせたなんの動物か分からないフォウ君も無事レイシフト出来たようだ。　しかし、それ以上声は聞こえなかった。

「……キリシュタリアとカドックは？」

「いえ、私達がここにレイシフトした時にはもう既にいませんでした。　戦闘痕も無いことから、レイシフト時の空間座標にズレが生じたと考察します」

「……とりあえずカルデアに連絡しよう。　マシュ、頼む」

「はい、マスター」

マシュが端末を操作するとカルデア所長のオルガマリーの顔を中心に、ドクターロマン。　ダヴィンチちゃんの顔が見える。

「藤丸、マシュ両名。　レイシフト成功しました。　しかし、キリシュタリアさんとカドックさんの姿が見えず……」

「ああ、それについては心配要らないよ。　どうやら座標がズレてしまった様だね。　ここから数キロ先の所にいるよ。　合流ポイントを指定するからそこに向かってくれ」

「いい？　キリシュタリアとカドックがいないんだから下手に自分で判断しない事！　特に藤丸は一番魔力が無いくせにマシュとセイバーの二人の魔力供給のパイプ役なんだからね」

??????????、ありがたいお言葉を頂いて俺達はポイントに向かった。

と、歩いている途中に崩れかけている砦を見つけた。
「うわ……ボロボロだね。　これも戦争のせいなの？」
「いえ、百年戦争と、言っても実際に百年間戦争していた訳ではなく、この時期は休戦中のはずだったのですが……」
と、話していたらカルデアから通信が入りロマンの怒鳴り声が響く。
「二人とも！　直ぐにそこから離れるんだ！　この生態反応は……ありえない！　龍だ！　ドラゴンが来るぞ！」
空に轟く咆哮が聞こえると同時に、砦の中から砦と同じくらいボロボロの兵士達が疲れきった様子で表れ、僅かばかりの迎撃体制を取ろうとする。
「マスター！」
「うん！　マシュ！　アルトリア！　皆をまも……」
「バカ！　やめろ、藤丸！」
「所長!?　どうして！　このままじゃ砦の人達が！」
「余計な戦闘はするなって言ったでしょ！　彼達には申し訳ないけど、ここは迂回して先にキリシュタリア達と合流するの！　これは命令よ！」
「……嫌だ！　目の前の人を救えないなんて！　何のための英霊だ！　マシュ！　アルトリア！」
俺の声と同時にマシュと霊体化していたアルトリアが飛び出す。
しかし、二人がドラゴン達に切り掛る前に砦と俺達の逆側から、誰かが飛び出して来た。　その人物は十数メートルのドラゴンに飛び乗り、手に持った得物でドラゴンを屠る。
「あれは……？」
「藤丸君、あれはサーヴァントだ！　とにかくあのサーヴァントを援護して！」
「分かった！」
俺が指示を出すよりも先に二人は突然の乱入者に対応して謎のサーヴァントを援護する。　十数匹いるドラゴンが全滅するまで十分程度であった。

突然現れたサーヴァントに俺達が駆け寄ると、向こうの方から声をかけてくれた。
「助力に感謝します。　あなた達はサーヴァントと、そのマスターですね」
どうやら女性のようだ。
「ああ、カルデアのマスター。　藤丸立香です。　こっちはデミ・サーヴァントのマシュと、アルトリアです」
彼女は鎧に身を包み、白く輝く旗を持っている。　金色の髪は束ね足元に迫るほどだ。
「自己紹介ありがとうございます。　私はジャンヌ。　ジャンヌ・ダルクです」
ジャンヌ・ダルク!?　そのくらい有名なら俺ですら分かる！　フランスの聖女なら確かにこの地由来の縁で聖杯から召喚されても可笑しくないはずだ。　サーヴァントの強さはその地での知名度に依存する。　この地での彼女はほぼ最高クラスの力を発揮出来るはずだ。
思わぬ戦力の確保に驚いたが、彼女の顔を見たらもっと驚いた。
彼女の顔立ちは、俺のサーヴァント。　アルトリア・ペンドラゴンと全くと言っていいほど同じ顔だったのだから！

第一特異点　竜の魔女

ジャンヌとアルトリアが同じ顔？　髪型とかの違いはあるけど顔そのものは全く見分けがつかないくらいだ……。

アルトリアも驚いているようで口をパクパクさせている。

「……驚きましたね。　あなたのサーヴァントと私はどうやらほぼ同じ顔みたいですね……。　それより、私達がここに居るのはよろしくないので、どこかに移動しましょう」

「あ、ああ。　それなら俺達と一緒に来てくれないか？　仲間と合流する所なんだ」

「ええ、分かりました。　行きましょう」

??????????

その後はトラブルも特になく指定された合流ポイントにたどり着けた。　キリシュタリア、カドックも新しいの仲間のジャンヌがいることに驚いていたけど経緯を説明した。

「なるほど……救国の聖女ジャンヌ・ダルクか」

「いえ、私は聖女なんかではありません」

「はんっ！　また優秀なサーヴァントを捕まえたじゃないか藤丸」

何はともあれ先ずは霊脈にマシュの盾を接続してカルデアかるの物資魔力の供給を確保することが先決だ。

??????????

……と言う訳で私達の目的は聖杯によって引き起こされた事件の解決と聖杯の回収だ」

現地での交渉はキリシュタリアが行う手筈だ。　ジャンヌ自身は聖杯によって召喚されたが、何の目的で召喚されたかが分からず、イレギュラーな聖杯戦争のせいでルーラーと言う特別なクラスの特権をほぼ失っている状態らしい。

「申し訳ないですが、今の私はルーラーとしての力はありません」

「……ねえ、ルーラーってどんなクラスなの？」

「そんなのも知らないのか。　駄マスターめ。　教えてやるよ。

ルーラークラスは聖杯戦争においてサーヴァントの暴走とかの理由

で正常に聖杯戦争が行われない自体が発生した時に聖杯をマスターとして召喚されるクラスだ。　ルーラーはクラススキルとして真名看破や令呪といった能力を持ち合わせている」
サーヴァントが令呪を持っている!?
「はい、ですが今回に置いては真名看破や令呪といったスキルは持ち合わせていません。　ただのサーヴァントと変わりありませんし、本来の力は出し切れないようです」
「それでもかなりの戦力になる事は間違いない。　聖女ジャンヌ・ダルクよ、良ければ私達と行動を共にして今回の異変の解決に助力してくれないだろうか？」
「ええ、私で良ければ喜んで」
「そうと決まれば先ずは情報収集からだな。　この地で何が起こっているのかを確かめないと。ジャンヌはこの時代に行きた人物だ。
無闇矢鱈に出歩いたら問題だろう。　私とジャンヌは残ってこの霊脈を守っているから立香とマシュ。　そしてカドックは街に行って手がかりを集めて欲しい。　特に立香達が戦った龍。　あれは勿論この時代には存在しないはずだ」
??????????あの竜についてかい？　ああ、知ってるよ。　……魔女だよ」
情報は案外あっさり手に入った。　どうやら魔女と呼ばれる人物が竜を操り人々を襲っているらしい。
「魔女……か、これだけの竜を召喚して操れる位の魔術を扱えるって事は、相手はキャスターになるのかな？」
「いや、流石にこれだけの判断材料で敵のサーヴァントのクラスを推測するのは無理だ。聖杯の力があればたとえバーサーカークラスでさえ最上位の魔術を行使できるだろう」
と、俺とカドックが話していると急にカドックのキャスターが現れる。
「カドック。　サーヴァントの気配よ。向こうの街にサーヴァントがいる」
「敵か？」

「分からないわ」
「どうする？　カドック」
「決まっている。　キリシュタリアと合流するぞ、もし向こうのサーヴァントが聖杯持ちの敵サーヴァントだったら間違いなくやられる」
「分かった、ドクター。　キリシュタリアに連絡して、合流して向こうのサーヴァントに会いに行こう」
「分かった。　ポイントを指定しよう」
急ぐぞ。　奴がいつ動き出すか分からない」
??????????
合流ポイントまで走っていると、マシュ達が急に立ち止まり、カルデアからも緊急通信が入る。
「大変だ立香君！　例のサーヴァントが君達を探知した！　猛スピードでそっちに向かってきてる！　逃げるのは無理だ、どうにか持ちこたえてくれ！」
「っ……！　マシュ！　アルトリア！　」
「はい！　マシュ・キリエライト。　専守防衛に務め、増援まで耐えてみせます！」
「ええ、マスター。　退っていて下さい」
「キャスター。　援護を」
「ええ、マシュ。　アルトリア、死なないでね」
唐突な突風と共に、俺ですら感じる強大な魔力が大気を震わす！
この感覚は冬木の黒アルトリアと同じくらい、嫌！　それ以上だ！
丘の向こうから現れたのは今まで戦ったどの竜よりも大きく、強靭であった。
「なんて大きさ……」
「……アルトリア、いけそう？」
「いえ、正直、今の私の魔力供給量では令呪を使っても厳しそうです」
「くっ……カドック。　キャスターの宝具では無理なの？」
「ああ、何度も言うがキャスターはあまりこういう突発的な戦いは

苦手なんだよ。　陣地作成スキルで自分にとって戦いやすいフィールドを敷き、戦う前に勝つような戦法が得意だからな」
「やっぱりキリシュタリア達が来るまで持ちこたえないと、マシュは防御に専念して。　アルトリアはマシュの防御のスキをついて攻撃を。　死なない程度にね」
「はい！」
「ええ」
「……あの女はいないようね」
唐突に竜の上から声が聞こえる。　あれ程の巨竜を従えているのだからきっとあいつが……
「竜の魔女！　」
「へえ、あなた達がマスターね。　どうやらあの聖女様はいないようですが、まぁいいです」
そう言いながら魔女が手をかざすと、空間の魔力反応が跳ね上がる！　高濃度の魔力が実態を帯び、現実に投影される感覚。
「まさか……！」
「ええ、聖杯はもとよりサーヴァントを召喚する機能がある。　それを保持者の私が出来てなんの問題があるのでしょう？」
現れたのは六騎、剣を携えた少年のようにも少女の様にも見えるサーヴァント。　巨大な槍を手に持ち、その佇まいからは優雅さすら伺える青白い男のサーヴァント。　緑の髪に獣の耳が見える、弓を持ったサーヴァント。　杖を手に持ち、恐ろしいまでの美貌を持つサーヴァント。　同じく杖を持ち、召喚されたサーヴァントの中で唯一目に光を残しているサーヴァント。
竜に加え竜の魔女以外に五騎のサーヴァントが！　唯一こっちの勝っていた数の優位性すら無くなってしまった……。
「……ますたー」
「大丈夫だマシュ。　キリシュタリアとジャンヌを信じよう」
「……ふっ。　あはははははは！　安心しなさい！　迷える子羊よ！　私はあの女に用があるの、だからあの女が来るまでは待っていてあげますとも」

あの女？　ジャンヌの事か？　ともかく、増援が来るまで待って貰えるならこちらにも正気があるかもしれない。　ここは大人しく待つしかないか……。

数分も経たずにキリシュタリアとジャンヌが到着し、竜の魔女と相対することになるが、依然としてこちらが不利である事に変わりない。

ジャンヌを見つけた魔女は両手を広げて邪悪な笑みを浮かべながら叫ぶ。

「ああ！　会いたかったですよ！　私！」

そう言い放った竜の魔女の顔は、ジャンヌと瓜二つの顔で、ジャンヌのまるで鏡写しの様なサーヴァントであった。

??????あれは……私？」

「ええそうよ。　無能の出来損ないの私。　私達の犯した間違いはこのフランスを救おうとした事。　この国の人間に価値はない。滅ぼすしかないのですよ」

「そんな事はさせません！」

「どうやって!?　まさかそこの弱々しいマスター達と共に戦うつもり？」

「……確かにこのままでは厳しいと言わざるを得ないな。　ここは一時撤退した方がいい」

「させるとでも!?　ランサー！　アサシン！」

色白の男と美しい仮面を被った女が竜から飛び降りる。

「許しが降りた。　さぁ、暴力的に貪ろうとも！」

「血と臓物は私に譲ってくださる？　王様？」

「なら余は何を貪れば？」

「魂などいかがでしょう？」

二体の狂兵が、迫る。

第一特異点　竜殺しの英雄

血に飢えた槍兵が迫る。　眼前に槍の先端が迫り俺の顔に刺さるまで数瞬と言った時に、間にアルトリアとマシュが割り込んで来て防いでくれた。

「マスター、下がって！　マシュ。　援護を！」

「はい！　マシュ・キリエライト、行きます！」

冬木の時とは違い、シュミレーションルームで二人で戦う訓練は積んでおり、戦闘の素人である俺が見ても上手く常に敵のランサーを挟む陣形を組んで戦っているのに敵を崩せない。

「くっ……！」

「このっ……！」

「ふむ、余を孤立させ叩く戦法は間違いではない。　貴様らの失態は一つ。　戦力を見誤った事だ。　小娘二人程度で余を打倒出来ると思ったか！」

槍の一振りで二人を吹き飛ばす。　キリシュタリア達に視線を向けるも、向こうでも戦闘が既に始まっている。

黒ジャンヌの乗る竜をジャンヌとカイニスで抑え込んでいる。

カドックとキャスターはもう一人の敵サーヴァントと睨み合っている。

「何よそ見している！　ボンクラ！　お前は二人のサポートをしろ！」

「あら、貴方こそよそ見をする余裕があって？」

「お生憎だが僕のサーヴァントは優秀でね！　お前程度キャスター一人で十分なんだよ！」

「ふーん。　カドックは私の活躍より藤丸の方がご執心なのね」

「お喋りしている余裕はないわ！　貴方の生き血を啜るところを貴方のマスターに見せてあげる！」

「出来るものなら。　ヴィイ！　やりなさい！」

キャスターと敵のサーヴァントの魔術が飛び交う。　と、キリシュタリアの方から爆発音が轟く。

「キリシュタリア!?」
思わず叫ぶも、煙の中からキリシュタリア達が現れる。　傷は負っているが、三人とも致命傷は受けていないようだ。
「大丈夫だ。　だが、あの竜が厄介だ。　あれは聖杯によって産み落とされた魔竜『ファブニール』だ。　戦うこと自体は出来ても殺し切るには強烈な竜殺しの逸話をもつサーヴァントが必要だ」
「ああ、サーヴァントは逸話から力を得る」
「その通りだ。　勿論。　アルトリアやカイニスも竜を打倒した事はあるかもしれないが逸話として昇華するほどでは無い。　ここは一回離脱するべきだ」
「それはそうだけど……どうやってここから逃げるんだ？　むしろこのままじゃ全滅……」
「いえ、何か来ます！」
ジャンヌが叫んだと同時に薔薇の花びらが吹き荒れ、お互いの陣営を二分する。　そこに現れたのは馬に乗った少女と、痩せており指揮棒を持った長身の男の二人だった。
「さあ、今の内に！　逃げましょう」
「君は？」
「自己紹介は後ね。　アマデウス。　お願いね！」
「分かったよマリア。　宝具『死神のための葬送曲（レクイエム・フォー・デス）』！」
影から現れた楽器を持った人物が大音量で演奏を始める。
「ぐぅぅぅう!?　この音……は！」
「なんて不快な！　殺してやるぅ！」
「今だ！　逃げるぞ！」
キリシュタリアの叫び声に弾かれたように全員が街の外まで走る。
薔薇吹雪と音楽が収まる頃には俺達は無事に逃げる事が出来たようだった。
「逃げられたか……」
「ワラキアの王ともあろう方に慈悲の心があったとは知りませんでしたよ」
「あの盾の娘。　奇妙な感覚があった」

「恐らくはデミ・サーヴァントなのでしょう。　それより、彼女達を負いますよ。　ライダー。　後を追ってください」
「……分かったわ」
ライダーと呼ばれた女性が消える。
「ランサー。　アサシン。　今回は見逃しますが次はありませんよ？」
「言われなくてもだ。　次こそはアイツらの血で余の槍を染めあげよう」
「いけませんわ王様。　あの少女の生き血は私の物ですから」
「いい加減にしなさい。自由にふるまえと言っても戦う相手くらいは間違えないように」
「……ふん。　よかろう。　この女の血はあやつらの後としよう」
「それも彼らがライダーから逃げ切れたらの話ですけどね」
????????
「カドックのキャスター、敵の追手は？」
「……一騎いるわ。　それ以外はいないようね。　単独で追ってきたの？」
「よほどの馬鹿か、よほどの実力者か」
「どっちにしても戦うしかなさそうだな。　キリシュタリア」
、ああ。　カイニスとアルトリアで向かい打とう。　アナ……キャスターは後方支援。　マシュとジャンヌはマスター達の護衛を頼む。
相手は単騎で我々五騎に挑んでくるんだ。　死なないようにを意識して戦うんだ」
「わかった。　えっと……所で、さっきは助けてくれてありがとう。
君たちもサーヴァントだよね？」
「ええ、私は真名をマリーアントワネット。　この国、フランスの王妃よ。　こっちの素晴らしい音楽を奏でる人は……」
と、マリーが指揮棒を持ったサーヴァントを紹介しようとするも、男の方が制止する。
「自己紹介は自分でするよ、マリア。　僕の名前はヴォルフガング・ア

マデウス・モーツァルト。よろしく、優秀なマスターとそのサーヴァント達」
「ああ、よろしく。　君たちははぐれサーヴァントで一緒に戦ってくれるんだよね？」
　俺がそう聞くが、二人は苦い顔をして首を振る。
「確かに私たちは聖杯によって召喚された主無きサーヴァントだけど戦闘能力はほとんどないから一緒には戦えないわ。　できてせいぜいがさっきみたいに横槍をいれるくらいね」
　直接的な戦力にはならないらしい……。　でも仲間が増えるのは心強い！　その事を踏まえてキリシュタリアとカドックと俺で作戦を練る。
　突発的な戦闘を除いたら初めての戦いだ。　無意識のうちに拳を握りしめている。　すると右手をマシュが、左手をアルトリアが包んでくれる。
「大丈夫です。　一人ではありません」
「その通りです。　確かに私たちがあなたと戦った経験は少ないですがどれも強敵でした。　そしてそもどれも勝利してきました。　騎士の誇りにかけて此度の戦いもあなたを勝利に導きましょう」
「……ありがとう。　俺、少し不安だったんだ。　なんのとりえもない俺が、こんな戦いに参加していいのかって。　でももう迷わない。
　マシュ。　アルトリア。　キリシュタリア。　カイニス。　カドック。　キャスター。　皆がいるなら戦える」
　その言葉に皆が頷いてくれる。　するとキャスターが前に出て手を差し伸べる。
「その心意気よ。　もうあなたをただの一般人とは呼ばせません。そしてそのような戦士に真名を明かさないのは失礼に当たります」
「おいキャスター」
「黙りなさいカドック。　皇女たる私に恥をかかすつもり？　藤丸立香。　私の真名はアナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ。　ロマノフ王朝最後の皇女よ」
「ロマノフ王朝……。　確か昔のロシアの事だったよね」

「ええ、博識ね」
「もういいだろ？　それより、問題は追ってくるサーヴァントだ」
「あ、ああ。　この先で森から抜ける。　そこでなら数の優位を活かせるだろう」
「分かった」
　全員打ち合わせの通りの所に着いたところで敵のサーヴァントが追いついた。　向かうはアルトリアとカイニスとジャンヌ。　そして離れたところに俺とキリシュタリア、そしてマシュが盾を構えている。
「どうする。　先に動くか？」
「いや、ジャンヌは守りに特化したサーヴァントだ。　先手に回るより応手に回ったほうがいいだろう」

　と話していると向こうのサーヴァントが名乗りを上げた。
「サーヴァント。　バーサークライダー。　真名をマルタ貴公らの首を上げる名だ」
「マルタ……。　邪竜タラスクを退治した聖人だ。　そんな人物まで狂化してしまうなんて。　流石は聖杯の力か……」
「でも、戦うしかないんだよね？」
「ああ。　聖杯を依り代に召喚した時にマスターとなる黒ジャンヌが狂化を施したのだろう」
「ええ、私を見事倒して御覧なさい！」
　そういいながら杖を構え人間には不可能な速度で迫る。　それを当初の予定通りにジャンヌが受けアルトリアとカイニスが挟撃する。
　しかし、理性を失う代わりに強力な戦闘能力を授かっている狂化サーヴァントの力は凄まじく、杖の一振りで三人を吹き飛ばす。
　三人から距離を取ったマルタは一直線に俺たちに向かってくる。
　マシュが飛び込んで突進を受けとめる。
「通しません！」
「大した盾ね。　使い手である貴方の心が折れない限り決してその盾が砕けることは無いでしょう」

「先輩には手を出させません！」
「マシュ！　くそっ！」
「だい……じょうぶです。　先輩達には触れさせません。　それがこの盾を持った時に誓ったんです！」
　マシュの気迫に押され、一瞬マルタの攻撃の手が緩む。　その瞬間の遠くで狙いを定めていたアナスタシアが逃さなかった。
　風を切る音。　数瞬遅れて肉に氷が突き刺さる鈍い音。
「……見事ね」
　いくらサーヴァントとは言え、体に大穴が開いてしまっては消滅するより他無い。　末期の瞳が俺を向く。
「良いサーヴァントを持ったわね」
「ああ」
「この先の村に竜殺しの逸話を持ったサーヴァントがいる。　恐らくマスターはもうすでに向かっているでしょう」
　そう言い残して聖女マルタは消滅した。　堕ちた聖女によって召喚された竜を御した英雄は何を思って第二の生を受けたのか。　真相は分らぬまま俺たちは言われた町へと歩を進めた。

第一特異点　二人の聖女

「急いだ方が良いわ。　私のマスターが竜殺しのサーヴァントの気配を感知したらきっと殺しに向かうでしょう」
それだけいい残して黒ジャンヌのサーヴァント。　マルタは消滅した。　黒ジャンヌの乗る邪竜『ファブニール』を打倒するために竜殺しの逸話を持つ英雄は必要だ。言われた町に向かうと既に火の手が上がっている！
「キリシュタリア！　町が燃えている1」
「ああ。　向こうは竜に乗っている事に加えてこちらは一度マルタに襲われている。　私たちの足止めの意味も込めて襲わせたのだろう」
「のんびり話している場合か。　町中だと乱戦が予想されるからアナスタシアの援護も無理だろう。　僕とはぐれの二人で町の住民の避難を誘導する。　そっちは任せるぞ」
「ああ、気をつけてな。　ジャンヌはどうする？」
「私はもう一人の私に会いに行きます。　彼女とは決着を付けなければなりません」
町の中心部は広場になっていた。　普段なら噴水の周りに住民が集まり井戸端会議に勤しむ筈だが、噴水は無残に破壊され、そこにいるのは竜に乗った落ちた聖女。　黒いジャンヌダルクともう一人。
大剣を構えファブニールを睨み付ける男がいる。　おそらく彼こそが竜殺しの英雄なのだろう。
「その呪われた体で良くここまで粘りましたね。　流石は竜殺しの大英雄ジークフリートですね」
ジークフリートと呼ばれた男はボロボロになりながらも剣を黒ジャンヌに向ける。
そこにアルトリアとカイニスを先頭に俺たちが割り込む。
「大丈夫ですか？　私の盾の影に！」
「ああ、すまない。　君たちは？」

「あの黒ジャンヌを倒そうとしている者だ。　私はキリシュタリア・ヴォーダイム。　一応このメンバーのリーダーを務めているものだ。　貴公はニーベルンゲンの英雄ジークフリートで間違いありませんね？」
ジークフリートが首肯する。　そう話している間にも邪竜の猛攻は続いており、アルトリアとカイニスが必死に応戦している。
「もう一人の私！　フランスを救おうとした貴方がなぜ今度はこの国を滅ぼそうとするのです！」
ジャンヌが叫ぶ。　それを聞いた黒ジャンヌは哀れな者をア酒笑うように声を上げる。
「まだ分かってないんですか!?　まだその程度の認識なんですか？　決まっているでしょう。　復讐よ！　私を救国の聖女などと祭り上げておいて最後は魔女と石を投げつけたこの国に復讐をするのです1　そのために私はサーヴァントとなって生き返ったのです。かつて神の声を聞いた気になってこの国を救うなどという幻想に囚われたジャンヌ・ダルク。　貴方こそ偽り。　私こそがジャンヌ・ダルクとして正しいあり方なのです！」
「……私が間違っているとか、貴方が正しいとか、そんなことは私には分かりません。　私の言える事はただ一つ。　私は貴方を倒します」
白と黒。　空中と地上。　秩序と混沌かがみ合わせのように相反する二人が対峙する。
決着は、近い。

第一特異点　聖剣の在り方

睨みあう二人の聖女。　時間にしては一瞬だったが、彼女達の間では濃密に語り合ったのだろう。その語り合いを、竜の咆哮が途切れさせる。

「まずい！　ファブニールが動き出した！　カイニス。　足止めを」

「ああ！」

「アルトリア、頼む！」

「はい！」

カイニスとアルトリアが同時に竜に向かって飛び込み、竜の首を抉る。　しかし、傷は数秒も立たないうちに塞がり、修復し始めている。

「無駄ですよ！　邪竜ファブニールは聖杯によって召喚された一種の概念的存在です。　これを完全に倒すことが出来るのは竜殺しの英雄ジークフリートただ一人！　ですけど、その頼みの綱は今にも消えてしまいそう！」

事実。　ジークフリートの霊基は消える寸前だ。　邪竜を打倒した逸話を昇華させた宝具の発動はおろか、まともに戦闘行動をすることも出来ないだろう。

すると、槍を再び突き刺しながらカイニスが吠えた。

「それがどうしたってんだ！　死なねぇなら死ぬまで殺すまでだ！　おい、マスター！　魔力を寄越せ！　宝具でカタを付ける！」

その言葉にキリシュタリアが頷き、右手をかざしながら俺を向く。

「立香。　アルトリアにも宝具を。　竜殺しの宝具でなくとも押し返すことは出来るだろう」

「ああ、分かった。　アルトリア！」

俺が叫ぶとアルトリアも頷き、カイニスの横でエクスカリバーを構える。

俺とキリシュタリアが右手をかざし、令呪に光を灯す。

「「令呪を持って命じる。　宝具を発動させよ！」」

俺とキリシュタリアの腕から令呪が一画消え、アルトリアとカイニ

スの魔力が吹き上がる。
「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。　受けるが良い『約束された勝利の剣《エクスカリバー》！』」
「飛べ、飛べ、飛べ！どこまでだって、オレは行ける『飛翔せよ、わが金色の大翼《ラピタイ・カイネウス》』！」
　炎を纏い、不死鳥となったカイニスの突進とアルトリアの放った光線は竜を倒しきる事は出来なかったが、体の大部分を失い、確実にしばらくは戦えそうにない。
「やった！　これで…！」
「これでどうするつもりですか？」
　喜んだのもつかの間。　黒ジャンヌがファブニールから飛び降り、旗を振りかざしながら迫ってくる。マシュがそれを防ぐが、膂力の差はマルタの時以上で、マシュは攻撃されるたびにジリジリと後退している。
「所詮はサーヴァントの成り損ない！　いつまでも持ちませんよ！」
「それはどうかな？　やれ、アナスタシア！」
　どこからか声が聞こえ、氷の壁が地面からせり出し黒ジャンヌと俺たちを分断する。
「その声！　カドック！　アナスタシア！」
「良いから！　今は逃げるぞ！　そこのサーヴァントは僕と藤丸で担ぐ」
「分かった。　カイニス。　アルトリア。　殿は任せよう」
「ああ、さっさ行きやがれ」
　巨体のジークフリートを担ぐのは骨が折れたが、カドックが身体強化の魔術を掛けてくれたおかげで何とか逃げ切ることに成功した。
　小さな森の中に予めマリーとアマデウスが結果意を張ってくれており、体を休ませることが出来た。　森の中の野営地にたどり着いたとき、俺たち全員が限界を迎え座り込んだ。
「ああ、疲れた……。　キリシュタリア、これからどうするんだ？」
「先ずは状況の整理をしよう。　まずはマスター達の状況確認だ私

と立香が令呪を一画ずつ使って残り二画。　カドックは無事だな」
「ああ。　そしてサーヴェントの状況は僕のアナスタシアは殆ど消費はしていない」
「あら。　僕のなんて情熱的ね」
「五月蠅いぞ」
「俺のアルトリアは宝具を打ったばかりだけどまだいける。　マシュは大丈夫？」
「はい。　マシュ・キリエライトまだ戦えます」
「そして私のカイニスだが……」
「俺はまだ戦えるぞ」
カイニスがキリシュタリアを睨み付ける。　数秒間視線を交わしていたが、キリシュタリアがため息をつき、あきらめたように言う。
「良いだろう。　マリー嬢とアマデウスは……」
「私達は問題ないわ」
「私も問題ありません」
と、ジャンヌも続ける。
「すまないが、俺はまだ戦えそうにない」
と、震える体でジークフリートが言う。一番の問題はジークフリートの呪いについてだろう。
それについて、とジャンヌが手を挙げる。
「彼の呪を解く方法はあります。　私は大部分の能力が使えないとはいえルーラーです。　解呪の魔術は心得ています。　しかし、私の力だけでは解けないくらいの強い呪が彼に掛けられているのです」
「私も手伝うわ。　でも、私はキャスターだけどあまりまじないは得意では無いから完全には無理かも」
「僕も音楽しか能が無いからなぁ。　ま、やるだけやってみるか」
そうして二人のキャスターと聖女がジークフリートを囲む。
「方法は私が知っています。　皆さんは私に委ねて下さい」
「ええ」
「わかったよ」
ジークフリートの体から光が溢れてくる。　解呪の儀式自体は数

分で終わるらしいから残った俺たちで周りの警護をしている。
「なあ、アルトリア。　あの解呪、成功するだろうか……？」
「正直、厳しいでしょうね。　もう一騎。　聖人のサーヴァントがいたら良かったですが……」
「そう。　貴公らが屠ったあの聖女のような」
咄嗟にアルトリアが俺を突き飛ばしてくれなかったら、地面から飛び出た杭に串刺しになっていただろう。　見ると、さっき戦ったバーサークランサー。　マシュとアルトリアの二人ですらギリギリだったと言うのに、今回はアルトリア一人。　マシュを呼ぶかと無意識に右こぶしを握り締めるが、既に一画減っている令呪を見て思いとどまる。
（だめだ……もう既に令呪は使っている……。　今の俺じゃあアルトリアの宝具を発動させるのに令呪が必要だ。　マシュの分の踏まえて、ここじゃあ使えない）
「アルトリア、行けるな」
「ええ。　騎士の誇りにかけて」
「誇りか。　剣士よ。　今一度。　その名を聞きたい」
「我が名はアルトリア・ペンドラゴン。　ユーサー・ペンドラゴンの子。　ブリテンを統べる王だ」
アルトリアが剣を構え名乗りを上げる。　それに満足したようにランサーが頷く。
「ブリテンの騎士王。　それほどの相手ならば余も名乗らなければならない。　我が名はヴラド・ツェペシ。　ヴラド二世の息子であり、ワラキアの王とは正に余の事である」
ヴラド・ツェペシと名乗った人物はアルトリアから五メートル位の所で立ち止まり、槍を構える。
「ここからはこちらからの無粋な横槍を入れたり、そちらのマスターを狙うことはしないと誓おう」
「気遣い感謝しよう。　狂化されていてもその気高い魂は損なわれていない。　尊敬しよう。　ワラキアの王よ」
「言葉を紡ぐのはここらでいいだろう。　これからは互いの得物で

語り合うとしよう。　どちらかが死ぬまでな」
「ああ。　いざ！」
「尋常に！」
「「勝負！」」
武人同士の戦いとするならば、お互いで円を描きながら互いに傷つけあい、少しずつ深手を負っていく。　というのが相場だろう。　しかし、そうはいかなかった。
ヴラドが槍を地面に突き立てると、さっきのように地面から杭が生えてきた。　恐らくが彼の宝具なのだろう。　アルトリアに杭が迫り、串刺しにするまでもう数秒も無い。　と言った所で、アルトリアが前かがみになったと思うと一瞬で視界に捉えられない速度に加速し、杭の波を突破する。
「何っ!?この……」
「おしゃべりは終わりと言ったはずだ！　拘束、解放！」
光を放つ聖剣を振り切った後に何も残らなかった。サーヴァントは剣に血糊すら残さず消える。　しかし、確かに残ったものはある。
末期の刹那。　確かに彼は俺を見て言った。
敵への賛辞と感謝の言葉だった。
戦闘音を聞きつけ、キリシュタリアとマシュが訪れた時にはもう全てが終わっていた。
「立香。　戦闘があったのか」
「ああ。　でももう倒したよ」
「先輩！　ご無事ですか？
「ああ、それにしてもすごいな。　前回は苦戦したのにどうして今回はあんなに強くなったんだ？」
「ええ、それについてはこの剣の仕組みについて説明すれば分かりましょう」
そう言いながらエクスカリバーを俺に見せる。
「エクスカリバーは私が選定の剣『カリバーン』を抜いた後、湖の妖精から受け取ったものです。　その力は凄まじく、常時開放するには危険すぎました。　だから円卓の騎士と、宮廷魔術師の力を持って封

印したのです。　その拘束は十三。　拘束に一つずつ条件があり、条件が承認されるごとに聖剣の真の力が解放されるという事です」
聖剣の十三拘束。　それを解放することが出来れば、アルトリアの真の力が見れるのか。
「あ、それより。　皆ここに集まっちゃっていいのか？　儀式の護衛をしないと……」
「それならついさっき終わりましたよ」
声のほうを向くとジークフリートとジャンヌがこちらに歩いてきていた。　顔色も良くなっているし、儀式は成功したのだろう。
「カドックさん達がキャンプで待っています。　戻りましょう」
「もう大丈夫なのか？」
「その事ですが……」
「すまない。　俺とあの邪竜は繋がっている。　あいつが聖杯によって歪められているせいで俺にもその歪みが来ているのだろう。あの邪竜を倒さないとこの歪みは無くならないだろう……すまない」
邪竜を倒すための呪を解くためには邪竜を倒さないといけないって。　矛盾してるんじゃないか？
「ですが、少しばかり解呪ができました。　これで彼も戦闘ができるでしょう」
「よし。　俺達の力を合わせたら何とか戦えそうだ！　早速……」
と言った所で、森の奥、キャンプの方向から爆発音が響いた！
「この音！」
「おそらくもう一騎のサーヴァント！」
「急ぐぞ！」
キャンプ地に着いた時には凄惨な有り様だった。　マリーとアマデウスが倒れ、アナスタシアとカドックが黒ジャンヌのサーヴァントと睨みあっている。
「ジャンヌ！　マリーとアマデウスの回復を！　立香、行くぞ！」
「いいえ、もう終わりよ。あの可憐なお嬢さんの血は大変美味でしたよ」

その言葉を最後に、マリーの霊基が崩れ去り、光となって消え去った……。
「そんな……」
「何をぼさっとしている！　この人数だ！　一気に叩くぞ！」
「残念ながらそれも出来ません。　私はアサシンのサーヴァント。正々堂々と真正面からと言うような戦いは好まないので」
そう言いながら自身の後ろに女性の顔が付いた棺桶のようなものを出現させ、その中に飛び込み棺桶ごと消え去った。
「逃げられたか……。　キリシュタリア、アマデウスは？」
「ひどく損傷しているが、霊基がやられるほどじゃない。　アナスタシアとマリーを狙ったついでにアマデウスを襲ったようだな」
「……あいつはアサシンのくせに単騎で襲ってきた。　最初こそ不意打ちだったもののアマデウスは正面から戦って勝ったし僕たち相手にも正面から戦った。　なのに人が集まってきたら消える様な知恵は残っている。　狂化によって理性は消されていると思ったが……」
「彼女は元の自我が強いんだろうな。　アサシンの真名が分かったぞ。　女だけを狙った行動。　あいつが召喚したのは有名な拷問道具、鉄の処女。　血を求めるような言動。　あいつは血濡れの伯爵夫人。　エリザベート・バートリだ」
血の伯爵夫人。　吸血鬼は貴族のような生活をした美しい容姿をしている等の伝説を作った一人。　ヴラド三世と同じように伝説と化した実在の人物だ。
「なんにしても、これからどうするかを話し合わないと」
「ふむ……。　向こうには聖杯がある。　悠長に待っていてもこちらが不利になるだけだ。　今日はもう休んで、明日魔力反応が一番強い城に向かおう。　恐らく最終決戦になるだろうから今日はゆっくり休もう」
それだけを言い残して、皆野営の準備を始めた。　でも俺にはどうしてもマリーのことが忘れられず、食材を探してくると言い、アルトリアと少し離れた小川まで行った。

「……」
「……マスター」
「なあ、アルトリア。　サーヴァントは死なないんだよな？」
「ええ。　サーヴァントは過去の英霊の影。それ故に魔力切れはあっても死ぬという事は殆どありません。　私もアルトリア・ペンドラゴンであり、そうでないとも言えます」
「そうだよな。　ダヴィンチちゃんに聞いてそれは分っている。頭では分かっているんだよ。　でも、……やりきれないよ」
「貴方は魔術師ではない普通の人間ですからそのような考え方が慣れないのは当然でしょう。しかしそれは強さにも弱さにもなります」
アルトリアの碧眼は厳しさと優しさ。　少しの自愛の色が浮かんでいる。
「サーヴァントをただの道具と考えず、共に戦う仲間として考える。その様なマスターに出会えて私は幸運でした」
アルトリアが手を差し出す。　俺がそれを握ると俺より力強く握り返される。
「明日。　勝とうな」
「ええ」
そう決意を胸に秘めて野営地に戻る。　アルトリアの目と手の感触を思いながら眠りについた。

第一特異点　決着　サイドＡ

昨日の夜にキリシュタリアが立てた作戦を確認し、魔力を一番感じられる城。　恐らくは黒ジャンヌのいる城で間違いないだろう。近づけば近づくほど竜の姿を見かけることが増えた。

出来る限り戦闘を避け、遂に小高い丘の上にある城が目視出来る距離までたどり着いた。

「ようやくたどり着いたな。　皆。　作戦は覚えているだろうね？」

「ああ、ほとんどが正面突破の簡単な作戦だからな」

「戦力もない。　時間も無い中でキリシュタリアは良くやってくれたよ」

「……まぁそれはそうだが。　僕たちの誰かでも失敗したら全滅だぞ」

「だけど成功させるしかないだろう」

「お優しいリーダーだな。　まあ良いさ。　せいぜい足掻いてやるさ」

「……」

「先輩。　大丈夫ですか？」

マシュが俺の顔を覗き込む。

「ああ、大丈夫だよ。　俺は一人じゃないからね。　アルトリアが導いてくれる。　マシュが守ってくれる。　キリシュタリアとカドックが並んで戦ってくれる」

そうだ。　俺一人じゃああの燃え盛るレイシフト室で死んでいただろう。　俺は皆がいたからここまで来れた。　今度も皆と一緒なら戦える。そして

「うん。　今回は皆の力を借りる事になる。　でもいつか、俺が皆の助けになれるようになりたい！」

「ああ。　なら、この戦いは勝たないとな」

「うん。　行こう！」

隠れていた草むらから俺、キリシュタリア、ジークフリートが飛び

出し、目の前にいた数体の竜を一息に屠る。　しかし、奇襲はそれで終わり、仲間がやられた事に気づいた他の竜が吠え、一斉に襲い掛かってくる。
「アマデウス！　頼んだ！」
「ああ、大勢の観客相手に演奏するのは慣れているさ。　宝具死神のための葬送曲（レクイエム・フォー・デス）！」
影から死神の楽団が現れ、精神を直接揺さぶる大音量の大演奏が響く。　演奏の中に、確かな怒りを感じる。
「ここの雑魚どもは僕が引き受けよう」
「ああ、ありがとう」
「……。　らしくなく昂るよ。　こんなに昂るのはマリーにフラれて以来かな。　さあ！　行きたまえ！」
苦しんで空中でのたうち回っている竜の間をすり抜け、城門にたどり着こうと言う時に、今までの竜とは桁が違う咆哮が轟き、竜を統べる邪竜。　ファブニールが現れた。
音というより寧ろ衝撃に近いそれを耐え、真っ直ぐに睨み付ける。
「ここが正念場だぞ。　行けるか、立香？」
「勿論！　こいつを倒さないと中に潜入したカドックたちが危険だ。　皆。　力を貸してほしい！」
「はい！　マシュ・キリエライト。　行きます！」
「ええ。　行きましょう」
「カイニス。　行けるな」
「ったりめーだ！　それより、長髪！　てめーこそ行けるんだろうな!?」
「ああ。　例え刺し違えてでもこいつだけは俺が倒す。　倒さなければならないんだ」
その言葉を待っていたかのように竜がジークフリートに向かって火炎を放つ。　しかしそれは割り込んだマシュが防いでくれる。
「させません！　盾持ちの役目。　果たして見せます！」
盾の影から三人が飛び出し、ファブニールの攻撃を加える。　しかし、またみるみるうちに傷が塞がっていく。

「やはりジークフリートでさえ通常の攻撃では効かないか……」
やはり、聖杯に繋がっている邪竜を倒すにはその竜を屠った逸話を己の在り方にまで昇華した宝具でしか倒せない。
「キリシュタリア」
「分かっている。　やはり予想通りに宝具でしか倒せないようだ。ジークフリートへの魔力供給は私がしよう。　マシュの宝具であいつの攻撃を防いだ後アルトリアの宝具を発動させるんだ」
「分かった。　マシュ！　アルトリア！　頼む！」
「分かりました」
「はい！　アルトリアさんとジークフリートさんの宝具の準備が出来るまで守り切って見せます！」
「カイニス。　援護を頼む。　ジークフリート。　頼むぞ」
「おう！　任せな！」
「ああ、やり遂げよう」
カイニスとマシュがあえて真正面で邪竜に立ち向かい、アルトリアとジークフリートが剣を構える。　俺とキリシュタリアは以前やった時の様に令呪を構える。　二人の令呪が輝き、宝具の準備をしている。二人の剣から魔力が迸り出す。
しかし、当然その魔力を狡猾で知られる邪竜が見逃す筈が無く、体を一揺すりでマシュとカイニスを吹き飛ばし、ジークフリートへと狙いを定める。
大きく体を反らし、こちらを睨み付ける。　口から炎が溢れ出す。
その熱気に当てられたなら灰すら残らないだろう。
「させません！　マシュ・キリエライト。　皆さんをお守りします！」
そう言って盾を地面に突き刺し、自身の魔力を増幅させる。
「私の中のまだ名前の分からない英雄。　力をお借りします！　宝具、開帳します！　仮想宝具（ロード）　疑似展開（カルデ）／人理の礎（アス）！」
マシュの盾から魔力を幾重にも重ねた障壁を生み出し、マシュの心が折れない限り砕けない。　いまだ仮の名前しか与えられていない宝具。　自分自身を、そして何より守りたい誰かを守る優しくも苛烈

な宝具。
邪竜の火炎とマシュの宝具が真正面からぶつかり合う。　マシュの後ろの俺たちは、傷一つ受けていない。　そして、もう十分に時間はもらった。　必殺の一撃を打つ為の時間を。
「アルトリア！」
「カイニス、先陣は任せる。　その後は……」
「ああ、俺がやる」
「……」
「カイニス……」
「うるせえっつってんだろうが！　次にいらん心配してみろ。　あのトカゲより先にお前を殺すぞ」
カイニスが吠える。　それを聞いたキリシュタリアは少し悩んだような顔をしたが、決意したような顔になる。　そして令呪を一画だけ光らせた。
「分かった。　立香。　ジークフリート。　頼むぞ」
「ああ！」
キリシュタリアに並び、令呪に光を灯す。
「「令呪を持って命じる！　宝具を持って邪竜，ファブニールを打倒せよ！」」
その叫びを聞いて、邪竜が再び吠える。　しかし、再び攻撃が来る前にカイニスが飛び込む。
「させるかよっ！　宝具　飛翔せよ、わが金色の大翼！」
炎を纏った鳥となったカイニスが炎を放つ寸前のファブニールに突進し、火炎を防ぐ。　しかし、二度も阻まれた事に怒り狂った邪竜はカイニスを吹き飛ばした！
「キリシュタリア！　カイニスが……」
「あれがカイニスの役目だと事前に言っていただろう！　それより、宝具を！」
「……分かっている。　アルトリア！」
その言葉を待っていたようにアルトリアとジークフリートが宝具を発動させる。

「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。受けるが良い約束された勝利の剣！」
「黄金の夢から醒め、揺籃から解き放たれよ。邪竜、滅ぶべし！幻想大剣・天魔失墜！」
振りぬかれた二本の光線が混じりあい、より強力な光となってファブニールを飲み込む。　邪竜の末期の叫びは、聞こえなかった。
魔力を放出しすぎて、俺とキリシュタリアがへたり込む。
「……倒したぞ……。　やってやったぞ」
「ああ……。　そうだ！　カイニスは!?」
俺が周りを見渡しても、土煙のせいで全く見えない。　魔力のパスが繋がっているからアルトリアとマシュがいるのは分っている。近くにいたからキリシュタリアとジークフリートがいるのも分かっている。　でも、俺たちを守るために特攻してくれたカイニスが！
そうして土煙の中を手探りで探していたらキリシュタリアが声を上げた。
「いたぞ！　こっちだ。　手を貸してくれ！」
いつも冷静沈着なキリシュタリアが声を荒げている。　急いで駆け寄ると、カイニスを抱きかかえながら治療魔術を施しているキリシュタリアと自慢の銀の鎧がバラバラになっているカイニスがいた。
「マシュ！」
「はい！　魔力の供給をお願いします！」
俺の魔力を受け取ったマシュが治療魔術を施す。　しかし、出血が止まらずどんどん顔色が悪くなっている。
「そうだ！　キリシュタリア！　令呪……」
俺がそういうと、キリシュタリアが思う出したように令呪を構える。
「令呪を持って命じる。　カイニス。　生きてくれ！」
最後の令呪が消え、カイニスの体に淡い光が灯る。　すると、鎧の再生までは出来なかったが、出血も止まり、顔色も大分良くなった。
「カイニス。　良かった」
「ったく。　心配性だな、お前は。　俺様が死ぬわけねぇだろ？」

そうこう話している内にも、ファブニールを失った竜達が暴走状態になり、見境なく襲い掛かって来た！　ジークフリートがそれを薙ぎ払いながら叫ぶ。
「ここは俺に任せろ！　皆は中に！」
「分かった。　行くぞ、アルトリア、マシュ」
俺たちが駆けだそうとするも、キリシュタリアとカイニスが来ようとしない。
「立香。　ここから先は君たちだけで行くんだ。　カイニスは令呪で回復したが、おそらくサーヴァントクラスの強敵とは戦えないだろう。先に潜入しているカドック達と合流して君達で竜の魔女を倒すんだ！」
すると、ひときわ大きな竜の咆哮が轟き、その方向を見ると、多数の竜がこっちに向かってきている。　気付けば、オーケストラの音は聞こえない。
「行け！　行くんだ！　中にいるはずのアサシンはカドックが倒している筈だ。さあ！」
キリシュタリアの声に押されて、三人で中に入る。

第一特異点　決着　サイドB

作戦通りに、キリシュタリア達が正面突破を仕掛けて五分後に行動を開始する。　アマデウスの宝具による攪乱と、アナスタシアの魔術によって城内に潜入するまではばれないだろう。
「カドックさん」
「……」
「その……、他の皆さんは大丈夫なのでしょうか？」
「気にするだけ無駄さ。　お互いに助け合うことは出来ない。　どっちかがしくじったら両方死ぬ。　それだけだ」
向こうが死ねば潜入組の僕たちは戦力差で死ぬ。　僕たちが死んだら後から来るであろうキリシュタリア達はアサシンと黒ジャンヌの挟撃で死ぬ。　故に両方を同時に倒さなければならないのだ。
「それより、気を付けてくれよ。　僕たちも援護はするが、アサシンと直接戦うのは君なんだぞ」
そう言うと、ジャンヌは旗をきつく握りなおす。
「ええ、もう一人の私を倒し、この時代を修正するためにこの戦い、必ず勝って見せます」
「そうはさせないわ、わがマスターの元へは行かせません」
声の方向に振り向きながら、アナスタシアに目で合図を送る。　アナスタシアも僕の合図を待たずに声の方向へ氷弾を放つ。　しかし、そこにあったのは声の主ではなく、彼女が愛用している拷問道具、アイアン・メイデンだけだった。
「っ……！　囮だ！　アナスタシア、防御！」
そう叫んだ瞬間、首筋をなでるような感覚、思わず自分の周りに障壁を張り、防御を固める。
「違う！　カドックさん！　アナスタシアさんが！」
その声と共に悲鳴が。　障壁を解いて二人で駆け寄る。　血だまりの中のアナスタシアを抱きかかえ、令呪を構える。
「令呪を持って命じる。　生きてくれ、アナスタシア」
右手から令呪が一画消え、消えかけていたアナスタシアの体に生気

が戻る。
「……ありがとう、助かったわ」
「よかった……」
「あら残念。　殺せなかったわ。　そしてありがとう。　即死させてしまっては血を吸えないですからね」
　そう言いながら虚空から姿を現したのはバーサークアサシン。カーミラだった。
「血の代わりに銀の弾丸ならあるぞ？」
　僕が挑発してもどこ吹く風でジャンヌとアナスタシアを見つめている。
「ああ……、なんて美しくおいしそうな血なのでしょう。　神の声を聞いたなどと嘯き、民衆の貴重な血を流させた偽りの聖女の血。　高貴なるロマノフ王朝最後の純潔の血。　どちらから啜るか悩んでしまいますわ」
　血の味を想像しているのか、うっとりとした表情になる。　しかし、その間でも隙が一切見えない。
（くそっ！　ほんとに狂化されているのかよ……。　もっと特攻してくるかと思ったのに）
　切り替えろ、と頭を振りながら二人に指示を出す。
「ジャンヌ、君はとにかく前に出て攻めてくれ、アサシン相手ならそう簡単には死なないだろう。　アナスタシアは援護を。　僕らへの攻撃もあるぞ」
　僕がそう支持を出すと、二人とも頷いてジャンヌが旗を振りかざしながら飛び込む。　カーミラは手にした杖で正面から受け止める。
「ああ！　まずは貴方から吸わせてくれるのね！」
　そう言いながらジャンヌの背後にメイデンを召喚する。
「くっ！」
　跳んで背後の処刑道具を躱し、逆に背後を取る。
「はあああああああ！」
　鋭く叫んでカーミラの背中を一刺し。　と思ったが、カーミラの体が無数の蝙蝠になってジャンヌを覆う。

「これは!?　きゃあ!」
「くそっ吸血鬼の逸話か。　アナスタシア、援護!」
「もうやっているわ、マイマスター」
　そう言いながら人形をかざすと、突然吹雪が吹き荒れる。生前を過ごした、ロシアの吹雪だ。　吹雪で身動きが取れなくなった蝙蝠たちが集まって再びカーミラの姿を取る。
「小癪な……。　先に貴方から啜ってあげましょう!」
　そう叫びながら杖を上段に構えながら真正面から攻撃してくる。
　直接の戦闘が苦手なアサシンと言ってもサーヴァントの本気の攻撃が人間の僕には例え強化していても目で追うのがやっとだった。

　振り下ろされた杖がアナスタシアの脳天に突き刺さる。　と思った瞬間アナスタシアの体が砕け散り、氷の破片がカーミラに突き刺さる。
「くっ!?　これは……!」
「ひっかかった」
　声に反応して真後ろに杖を突きたてるが、あらかじめ構えていたジャンヌがそれを阻む。　そうして余裕を持って宝具の準備を終えたアナスタシアが宝具を発動させる。
「ヴィイ、全てを見なさい。全てを射抜きなさい。我が墓標に、その大いなる力を手向けなさい。疾走・精霊眼球(ヴィイ・ヴィイ・ヴィイ)!」
　アナスタシアの影から巨大な精霊が現れ、カーミラを押しつぶす。
　悲鳴を上げる暇も与えずにすべてを凍らせ砕く。　巨大化したヴィイが消えた時にはカーミラの姿はもう無かった。
「アナスタシア。　索敵」
「やっているわ。　……私たち以外に周囲に反応はないわ。　ほぼ確実に死んだはずよ」
　念のため自分でも索敵をするもやはり見つからない。　奴はもう死んだと考えよう。
　ふと、城内が静かすぎることに気が付いた。　入ったときは僕たちの存在を隠してくれたアマデウスの宝具が聞こえない。

「カドック」
「ああ。　恐らく彼はもう……」
　そう話していたら足音と聞きなれた声が聞こえる。藤丸を先頭にマシュと藤丸のセイバー。　アルトリアが殿でそれ以外に人影は見られなかった。
「おい、キリシュタリアはどうした？」
　最悪の場合を想定して聞くが、藤丸はそれを否定した。
「いや、キリシュタリアとカイニス。　あとジークフリートは外で竜達を押えててくれてる」
「そうか。　なら、ここからは僕達だけでやるしかないな。　時間をかけすぎると新たにサーヴァントを再召喚されたり、逃げられるかもしれない」
　残った戦闘要員はマスターが僕と藤丸。　サーヴァントはマシュ、アルトリア、ジャンヌ、そしてアナスタシアだ。　対する相手は恐らく黒ジャンヌのみ。　人数では圧倒的だが、あっちには聖杯がある。
　戦いの肝はいかに聖杯の力を使わせずに戦うかにかかっているだろう。
　残ったメンツにそれぞれ役割を振り分け、城の最奥部へと進む。扉の向こうから溢れる魔力で肌が粟立つ。　しかし、そんな事情を知ったか知らずか藤丸がドアを押し開ける。
　広間にいたのは二人だった。　ジャンヌと瓜二つの容姿をした、しかし同じ人物とは思えない邪悪な笑顔を浮かべている。　もう一人は黒ジャンヌの後ろに控えているやせていて飛び出そうな眼玉をギョロつかせている男だった。
「ここまで生き残るとは……。　正直驚きました。　全員でかかってきなさい。　敬意を表して私一人で相手をしてあげましょう」
　右手に竜が描かれた旗を、左手には直剣を構える。
「藤丸、いくぞ！」
「頼んだぞ、カドック！」
　この時代最後の戦いが始まる。

第一特異点　最終決着

ジャンヌ、アルトリア。　そして黒ジャンヌの三人がまず飛び出した。　次いで数瞬遅れてマシュが、さらに遅れてアナスタシアと俺たちが構える。
「参る！　はあああああああ！」
「えぇい！」
アルトリアが正面から切り込み、ジャンヌが後ろから旗を振り下ろす。　が、それらを剣と旗で軽々受け弾き飛ばす。　遅れて打ち込まれたマシュの盾も蹴りの一撃で吹き飛ばす。
「くそっ、アナスタシア、援護！」
「了解よ、マスター」
アナスタシアが人形を掲げると近づくだけで凍り付きそうな吹雪が放たれるが、それも旗の一振りで炎に阻まれてしまう。
「くそっ……やっぱり聖杯からリソースを得られているサーヴァントと真正面からぶつかっても勝ち目がないぞ！　どうするカドック！」
「……供給される魔力は確かに半無限でも、それを受け取る器は無限の容量を持っている訳では無い。　一撃ですべてを吹き飛ばすほどの力を打ち込めばいけるかもしれない」
全てを吹き飛ばす……。　アルトリアの宝具約束された勝利の剣（エクスカリバー）がまさにそうだ。　でも、俺の魔術回路が弱いせいで宝具を打つ為には令呪によるバックアップが必要で、その令呪は最後の一画。　確実に当てるために隙を作らなきゃ。
俺はカドックに目配せをし、アルトリアとマシュに合図をする。二人とも俺の意図を汲み取ってアルトリアが下がり、マシュ、そしてジャンヌが同時に跳び出して黒ジャンヌを抑え込む。　その隙にアナスタシアがジャンヌを囲むように魔法陣を作り始める。
「このっ！　厄介な！」
剣と旗を二人がかりで抑え込み、陣が完成する。
「準備出来たわ。　しっかりやりなさい」
ジャンヌと、マシュが飛びのくと、氷の壁が現れ、俺達と黒ジャン

ヌを阻むものは消え失せた。
「アルトリア！　最後の令呪だ！　あの黒ジャンヌに！　この時代に終止符を！」
　アルトリアも聖剣を振りぬきながら叫んだ。
「ええ、マスター！　立香、この聖剣は今この瞬間の為に！」
　俺の腕から最後の令呪が消え、アルトリアが上段に構える。
「っは！　来なさい！　私はすべてを否定する！　分かっているのよ！　私が偽りの復讐心を宿された傀儡であると。　だけどそれがどうした！　それでも私は今、ここに生きている！　私は貴方たちとあの本物の聖女を倒してこの時代で生きる！」
　黒ジャンヌがそう吠えると周りから炎に包まれた張り付け台が突き出てきた。　恐らくあれが黒ジャンヌの宝具あろう。
「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮！」
　と、剣を振りかざし、宝具を打とうとしている黒ジャンヌの目の前にジャンヌが旗も剣も投げ捨てて跳び出して、困惑している黒ジャンヌを抱きしめた！
「はぁ!?　っちょ、アンタ！　いきなり何を？」
「……。　ごめんなさい。　私は、貴方の事を何も分かっていませんでした。　単なる私の模造。　この時代を修正する際のただの敵かと思っていました。　私の似姿がこの時代の狂いの原因である理由が知りたかった。　でも、貴方もただの被害者。　一人ぼっちの子猫同然でしたのね」
「ジャンヌ！　その様な世迷言を聞く必要はありません！　竜の魔女である貴方こそが神の声を聞いた真の聖女で……」
「黙りなさいこの出目金！」
　聖杯を持っている男をジャンヌが一括すると、あまりの迫力に俺たちまで後ずさりする。
「確かにあなたは歪められて生まれた存在です。　ですがもう一人ではありません。　貴方が消える時、私もまた消えるでしょう」
　二人のジャンヌを、光が包んだ。
　光が収まると、そこにいたのは黒ジャンヌだけだった。　同時に、

アルトリアが膝をつく。
「アルトリア!?」
「すみません。　ジャンヌがいたことにより、拘束が外れきれず……。
　魔力のオーバーフローで私にも……」
　アルトリアも倒れ、エクスカリバーが手から落ちる。
「おお！　流石は聖女ジャンヌ！　あの攻撃を食らっても耐えられるとは流石としか言いようがありません！　お待ちください。　このジル・ドレ。　すぐに回復して差し上げ……」
「黙れ！　出目金！」
　さっきよりも数段大きな怒声が響く。黒ジャンヌが俺に剣を向けながら叫ぶ。
「確かに私の復讐心、存在そのものはこいつに創られた！　私はあの女の偽物。贋作だ！　だけど！　それでも！　だからこそ私は消えるわけにはいかないんだぁ！」
　竜の描かれた旗は折れ、鎧は砕け、片腕が折れても彼女の眼には今までよりも激しい炎が揺らめいていた。
　その炎は今まで己が身を焼いた炎より生じる復讐の炎ではなく、生きたいと。　生まれて初めての己の中より燃え滾る炎が瞳に宿っている。
「良いだろう、貴公のその精神。　賞賛に値する。騎士の誇りにかけて、私が……」
　と、アルトリアが立ち上がろうとするのを俺が制する。
「なにをする気ですか？
「アルトリアは下がっててくれ」
　そう言いながらエクスカリバーを拾う。　アルトリアが片手でも軽々振り回せるそれは、俺が両手で扱うにも余るものだった。　それでも、なんとか構える。　黒ジャンヌもボロボロになりながらも剣を構える。
「名乗りは上げないわよ。　私たちはお互い騎士ではありませんからね」
　数秒の沈黙。　そして両者叫びながら突進する。　先ほどとは

打って変わって遅く、お互いの剣は振り回すだけで剣技も減ったくれもない。　しかし、俺たちは本気だった。　生きるため、自分の未来を勝ち取るために俺たちは剣を振るう。　聖女と魔術師。　二人が剣を取り存在を示しあう。

　しかし、その時間は長くは続かなかった。　流石はサーヴァント。聖杯のサポートが無くても人間の俺なんて相手にならない。　少しづつ俺の方が押されていく。

　遂に俺の剣が大きく弾ける！　黒ジャンヌの剣が俺の喉元に迫る。

「マスター！」

　アルトリアの声が響く。　俺は黒ジャンヌの一撃をかろうじて躱し、回転の勢いで剣を振りぬき、黒ジャンヌの胴体に深々と剣を突き刺した！

「……。あーあ。　負けちゃった。　ま、いいわ。　最後に気持ち良かったし。　ねえ、藤丸立香」

「うん」

「あんたは最後まで負けんじゃないわよ」

　その末期の言葉を残して光となって消え去った。

　俺もついにエクスカリバーを落とし、膝をつく。　呼吸が荒い。エクスカリバーの力に振り回されて前人の筋肉がズタボロだ。　もう呼吸をするのもしんどい。

「認めぬ！　認めぬぞぉ！」

　出目金が叫ぶ。

「何故！　何故なのですか！　何故ジャンヌが敗北する!?　ああそうか！　まだ未完成なのですね？　よろしい！　ならば我が聖杯の力を持ってさらなる貴方を生んで……」

「『幻想の鉄処女（ファントム・メイデン）』」

　ジルドレエの背後にアイアンメイデンが現れ、何かを叫ぶ暇もなく処刑する。現れたのはアサシン。　吸血鬼カーミラだった。

「お前……。　生きていたのか」

「それも今ので終わったがな。　聖杯の所有者が消え、時代の修正力

が強まっている」
　事実、城が崩れ始めカーミラの体も光に包まれていく。
「……いくのか」
「ええ。　この時代では私は倒されるべき敵。　さようなら。氷のキャスターとそのマスター」
　それだけ言い残してカーミラは消え去った。
「……さて、もうそろそろこの時代は終わる。マシュ。　聖杯の回収を」
「あ、はい！　マシュ・キリエライト、聖杯を回収します」
　盾の回収機構に聖杯を回収する。　それと同時にドクターロマンから連絡が入り、聖杯の回収を確認した事。　すぐにレイシフトの準備をする事と言われた。
「やっと現代に帰れるのか」
「ふん。　しかしこれでやっと第一の特異点が終わったばかりだ。気を抜くんじゃないぞ。　大体お前の戦法は令呪からの宝具に頼りすぎているんだ。　それもこれも基礎がなってないからだ！　いいか！」
　カドックが俺を指さしながら叫ぶ。
「帰ったらみっちり基礎から叩き込んでやるからな！」
　その言葉を最後にカドックとアナスタシアがレイシフトする。
「アルトリア。　マシュ今回はありがとうね」
「いえ、今回の戦いで私はまた強くなることが出来ました。　次の戦いも必ずや勝利に導いて見せます」
「先輩。　今回はありがとうございました」
　俺の視界もだんだんぼやけていく。　この時代にいられるのもあと数十秒だろう。
　初のレイシフト。　初の人理修復。　失敗とイレギュラーだらけの大変な旅だったけど、今回は何とか生き残れた。　安堵と次への希望と不安を胸に現代へ俺は帰る。

幕間の物語

俺の密かな楽しみがサーヴァントの召喚の場面に立ち会う時だ。あの召喚サークルの不思議な光、かっこいい英霊。　基本的に召喚に立ち会うのは召喚するマスターは勿論、所長のオルガマリー所長と所員をまとめるドクターロマン。　そしてダヴィンチちゃんは毎回参加している。

俺もほぼ毎回参加している。　俺でも知っているような英霊から、ヨーロッパ人しか知らないサーヴァントや、その逆のサーヴァントが現れたりするから面白い。

そんな中、今回の召喚実験では面白いのが見れた。　召喚実験の後、すぐにそのサーヴァントに会いに行った、

「クーフーリン！」

俺が声をかけたのはレイシフト先の冬樹で出会い、そのままカルデアに召喚されたサーヴァント。　ケルトの大英雄。　クランの猛犬クーフーリンだった。

「ん？　誰だ、お前？」

奇妙なことに、クーフーリンはおれの俺の事を覚えていないようだ。　俺が戸惑っているとフードを被り、杖を持ったクーフーリンが廊下から現れた。

「ん？　坊主じゃねえか。　何してるんだ……って、そこにいるのは俺じゃねぇか」

「え？　どゆこと？」

俺が聞き返すと二人のクーフーリンが答えた。

曰く、サーヴァントによっては適正クラスによって複数クラスに跨って顕現できると言う話でそれのせいで複数に跨って同じサーヴァントが顕現し、此度の現象が発生したらしい。

「へー。　理解はしたけどいまだに信じられないよ。　同じ人がこの場に二人いるなんて」

そう言われて、二人のクーフーリンが顔を見合わせる。　当たり前だが全く同じ顔だ。　服装や得物の違いが無ければわからないだろ

う。
「そういえば、クーフーリンが戦っているとこあんまり見てないや。
冬木の時は周りを見ている余裕なんて無かったし」
「お、それならいっちょやってみるか！」
と、ランサーの方のクーフーリンがキャスターの方のクーフーリンの肩をたたいて言う。
やってきたのはシュミレーションルーム。　二人のクーフーリンがそれぞれ槍と杖を構える。　鏡合わせの様に全く同じ構えだ。
「じゃあ……、用意、はじめ！」
両者全く同時に飛び出す。　そこからの戦いは完全には目で追えるものでは無かった。　速さだけならアルトリアと大差ないだろうが、とにかく動きが立体的で双方槍術だけでなく超接近戦で体術まで使うからとにかく目まぐるしい。　しかし、流石にクラスと得物の差か、じりじりとキャスターが後退する。　そしてついに背中が壁につく。
「どうだ？　模擬戦闘だ。　ここいらでお開きにするか？」
ランサーがキャスターの喉元に槍を当てながらニヤリと笑う。
キャスターは諦めた様に杖を放り投げ、降参と言うように両手を挙げる。
「ああ、流石俺だ。　こんな杖でゲイボルグに正面からやっても勝てねぇわな。　だがな、面倒くさいがルーンってのは便利なもんだぜ！」
瞬間。　ランサーの足元から木の根の様な物が生え、襲い掛かる。
ランサーも咄嗟に跳び上がり、天井を蹴って態勢を整えようとすると、何かにぶつかり空中に張り付けになる。
「くっ。　てめぇ……なんにも仕掛けてこないと思ったら。　ルーンを空中に固定していやがったのか」
「おうよ。　一人で戦う時は槍使った方が手っ取り早いが、誰かと組んで戦うことが多くなりそうだからな。　こっちも悪くないぞ」
「……。　そうかもな。　降参だ」
今度は正真正銘決着だ。　キャスターがランサーを解放し、フード

を被りなおす。
「っと、どうだった坊主？　負けちまったが俺の槍術は？　中々なもんだろ？」
「凄いよ！　全然目で追えなかった！」
　俺が興奮してそう叫ぶと二人は満足して俺の頭を乱暴に撫でる。
「よし、運動の後は飯とするか！　キリシュタリアの奴が美味い茶を入れられるんだ」
「お、そいつぁご相伴にあずかりたいねぇ」
「ねえねえ、今度俺に槍を教えてよ」
「いいぜぇ、まずは握り方からだな」
　そうして、俺たちはキリシュタリア達の所に向かうのだが、そこにいたカイニスとどちらが最高の槍使いかを決めるためにシュミレーションルームにとんぼ返りする事になったのはまた別の話だ。

　ランサーのクーフーリンの召喚の時の一見以来。　俺はよくクーフーリンといることが多くなった。　そんな中。　カルデアの中では自由行動となっているから最近俺から離れていたアルトリアとばったり出会った。
「おや、マスター。　今日も訓練ですか」
「うん。アルトリアはまたご飯食べてるの？」
「ええ、最近召喚されたアーチャーのサーヴァントが大変美味しい料理を作ってくれるので」
「へー、飯を創るのが得意な弓兵ねー。　なんてやつなんだ？」
　クーフーリンが尋ねるけど、アルトリアは首を振る。
「それが……。　尋ねても答えてくれないのです。　大した英霊では無いからアーチャーと呼んでくれれば良いと」
「へー。　無名の弓兵ねぇ。　いっちょ顔を拝むとするか！」
　そうして食堂にたどり着くと、確かに赤いマントをきた褐色の肌に白髪の男が中華鍋を振るっていた。　俺達に気が付くと、鍋を置き、声をかけてくる。
「今日は早いな騎士王。　む、そこの槍兵は、ケルトの大英雄。　クー

フーリンとお見受けするが」
「ああ、そうだ。だが、俺がお前を知らないんだよなぁ。　真名を教えてくれよ。　弓兵」
　クーフーリンが睨むも、アーチャーは首を傾げるだけだった。
「いやなに、君が私を知らないのは単に私がそれほど高名なサーヴァントでないからだよ。　私は名乗るほどのサーヴァントではない」
　そういって再び料理に戻ろうとする。　しかし、ふと、と言うようにこちらを見る。
「今回は味方だ。　戦闘において肩を並べる事もあるだろう。　その時君たちに少しでも助力できたら改めて名乗ろう」
　今度は本当に話を打ち切り、俺たちに背を向けてしまった。
　そうして出された料理はチャーハンだった。
「おいしっ」
「うめぇ！　やるじゃねぇか！　これからもちょくちょく食わせてくれよ！」
「はい、今日も美味しいです。　アーチャー」
「……。　相変わらず美味そうに食べるのだね。　セイバー」
　そうして弓兵は今日も食堂の守護者として鍋を振る。

　深夜。　微妙な時空の歪みを解消するために俺とマシュ。　そしてあんまり顔を合わせた事が無かったマスターと解決に向かった。
　しかし、予想以上に時間がかかってしまい、帰りがこんな時間になってしまった。
　帰還してからも、レポートに時間を取られ、なんだかんだ夕飯も食べ損ねてしまった。このまま寝てしまいたいけど小腹がすいたから何かつまもうとしていると、キリシュタリアの部屋からわずかな明かりが漏れている。　ノックすると、カイニスが出迎えてくれた。
「なんだお前か。　丁度良い、入れよ。　おい、マスター。　いい加減休め」
　そう言いながらキリシュタリアを机から引きはがす。　机には大量の資料があり、その量は数時間程度では網羅できないほどだった。

「ああ、立香か、いらっしゃい。　今お茶を入れよう」
「俺がやるよ。　今日は朝から休みだったよね？　一体何時間資料集めしていたのさ？」
「朝からずっとだよ。　さっきまでカドックが手伝ってくれていたしそこまで手間じゃないよ」
　そういうキリシュタリアの笑顔には、隠しきれない疲れが見える。

「次の特異点のめどがついたんだが……」
「なにか問題が？」
　実は、とキリシュタリアが答える。
「特異点が同時に二か所発見されたんだ。　それでメンバーを考えているんだが……。　上手く決まらなくてな」
　資料を俺に見せながら珍しく愚痴を零す。　俺も目を通すが、確かによく考え、練られている。　今の戦力と、カルデアの魔力の貯蔵量。
　それぞれの相性までも考えられている。
「凄いな。　良くここまで考えられているよ」
「ほとんどはカドックのおかげだよ。　私の周りには頼りになる人が多くて助かるよ。　勿論君もだよ。　立香」
　真正面から言われたら少し恥ずかしい。　ごまかすために紅茶を呷ると火傷した。
「そういえば。　立香は一般からの候補生だったな。　一体どうやって君はここに呼ばれたんだ？」
「ああ、それはね……」
　と俺の過去の話を少しする。
　放課であることを告げるチャイムを、屋上で一人聞く。　転落防止のフェンスに背を預け、特に何をするでもなく空を見ている。　空もいつもと変わらない。　青く、白く。　そして中心にはすべての色を集めたような強い光。
「藤丸。　何してんだ？」
「ああ、いや。　特に何も。　空見てた」
　俺の言葉につられてクラスメイトも空を見る。　しかし、顔をしか

めてすぐに視線を校庭に移す。
「なー。　あいつ凄いよな」
　あいつ、と言って指さしたのは陸上部のとある生徒だ。　一年生ながら優秀な成績を残しており、全国大会にも出ている。
「ああいう人ってもう人生の目標が決まっててそれを疑わずにやっていくんだろうなぁ」
「……。　どうだろうな。　案外いろんな悩みを抱えていてしかも誰にも相談できずに悩んでいるかもよ」
「そんなもんかね」
「そんなもんだよ」
「……。　なぁ、献血いかね？」
「良いけど……。　いきなりなんで？」
「いやさ、俺たちはあいつ見たいに今すぐすげー事出来ないじゃん？　でも俺らの献血で誰かすげー誰かが助かったら実質俺らすげーじゃん？」
「なんだよその理論。　……まぁいいや。　行こうか」
　立ち上がり、ズボンに付いた誇りをはたく。　友人が持ってきてくれているカバンを掴み、駅前の献血ステーションに向かった。

「……で。　その献血ステーションの人がカルデアの職員で、その献血が実は魔術師の検査も兼ねていたって事」
　そうして話を〆た。
「俺はここに来れて良かったと思うよ。　まで何も出来ていないけど、きっといつか皆の役に立ってみせるよ。　だからこれからもよろしくね。　キリシュタリア」
　キリシュタリアは紅茶を一口飲んで、カイニスにアイコンタクトを送り、書類をまとめる。
「なら立香。　私の友人として早速手を貸してほしい。　次の特異点。　同時に攻略する。　一つのリーダーは私が。　そしてもう一つは立香。　君に任せたい」
　真っ直ぐに俺を見つめてくれる。　今までここまで俺を見てくれ

た人はいない。
「俺は……」
ちらり、と右腕の令呪が目に付く。
「分かった。　やるよ。　任せてくれ」

第三特異点　大海原への船出

まずい事になった……。　今回。　特異点が同時に二か所発見された。　キリシュタリアは今回二か所同時の攻略を提案した。　オルガマリー所長達はこれを承認。　第二特異点をキリシュタリアが、そしてこの第三特異点は俺が指揮を執って攻略する事になった。

「藤丸。　無事か？」

「ああ。　俺もマシュも無事だ」

今回、こっちにレイシフトしたのは四人。　俺とマシュ。　前回の戦いでアルトリアと戦闘において相性がいいと判断されたからかカドックが。　そして最後は

「私もいるわ。　これで全員無事にレイシフト成功ね」

最後のマスターはＡチームのセイバーのマスター。　仮面のサーヴァントを連れてレフと戦ってくれたオフェリアだ。　腕を組み、きつい視線を俺に向けている。

前回と同じ様に霊脈を探す。　が、見渡すまでもなく俺たちがレイシフトしたのは小さな無人島。　島の径は数十メートル程の小さな島だった。

「さて……。　これからどうしようか

俺が皆に相談しようと一人ごちると、オフェリアがため息をつく。

「どうしようかって……。　貴方は一応こっちのリーダーなのでしょう？　もっとしっかりしてくれないと困ります」

「うっ。　ごめんなさい」

思わず敬語になる。

とにかく、この島では霊脈の確保は難しいから、どこか別の島に渡る必要がある。　でも、船も何もない状態で海に出ようとするのは流石に無理がある。

どうしようかと悩んでいたら、水平線の彼方に船が見えた！

「あれ船じゃないか？」

俺が指さすと、三人もその方向を見る。

「……そのようね」

「乗せてもらえてくれないかな？」
「よし、マシュ。　僕の鞄を取ってくれ」
「はい、これですか？」
　手渡されたカバンを漁り、発煙筒を取り出す。
「カドック。　それは何ですか？」
「発煙筒だ。　これで煙を出して周りに自分の位置を知らせるんだ」
「……魔術でいいのでは？」
「……」
　カドックは無言で煙をつける。　しばらくして船もこちらに気が付いたのかこっちに進路を向ける。　程なくして船が島の近くで止まる。　俺が手を振りながら駆け寄ると、急にアルトリアが現れ、俺を後ろに投げ飛ばした！
「うわっ！　アルトリア、何を!?」
　俺の質問は銃声で返答された。　さっきまで俺がいた地点に銃弾が撃ち込まれている。
「な……」
「先輩！　お怪我は？」
「ぼさっとするな！　アナスタシア、防御！」
　カドックの指示でアナスタシアが氷壁を張る。　その後ろに逃げ込みながら作戦会議をする。
「どうする？　たぶん相手は人間だ。　どのサーヴァントが出ても一騎で制圧できるだろう」
「いや、でもこのまま戦ったら船が壊れちゃう。　それに、俺達だけじゃ船の操縦は出来ない」
「なら、カッドクのサーヴァントで船の周りを凍らせましょう。　そうして私達で何人かを打倒する。　そうして氷を溶かして欲しければ船に乗せろと交渉するのです」
　オフェリアの提案に少し腕組をして考える。
「うん。　それしかなさそうだ。　ただし、殺すのは絶対にダメだ」
　おれの言葉に全員が頷く。　そうして俺の合図でマシュ、アルトリア、オフェリアのセイバーが飛び出し、島に上陸しようとしていた海

賊たちを数秒で捕らえる。
「動かないでください！　私たちはこれ以上危害を加えたくありません。　私たちの要求は私達をあなた達の船に乗せてもらいたいだけです」
　その言葉を海賊たちはすぐに受け入れ、数分後には海賊たちの船の上で潮風を浴びていた。　俺たちは船室の一つを借りて、カルデアとの通信を試みているが、相変わらず通信は届かない。
「だめか……やっぱりここワイファイ通じてないね」
「何言ってるの」
「冗談言っている場合じゃないぞ藤丸。　僕とお前は魔力量が少ない。　僕のアナスタシアはともかく、お前は二騎のサーヴァントの魔力を賄わなければいかない。　しかもマシュは消費魔力が少ないし、ある程度はマシュ自身の魔力で行動できるが、アルトリアの方の消費魔力は随一だ。　早いところ霊脈と接続できないと困るのはお前なんだぞ？」
「わ、分かってるよ」
　と、話していると、ドアの外から海賊が呼ぶ声がする。　出てみると、水平線の先に島が見える。
「あんた達行くアテが無いんだろう？　なら、あの人に会えばいい」
　案内されるままに付いていくと、奥から賑やかな声が聞こえる。
どうやら宴会をしているようだ。
「おーい、おーーい。　姉御ー。　変な人がいたんで連れてきましたー！」
　姉御と呼ばれた人物は二丁の銃をもった女性だった。
「あぁん？　客かい？　まぁいいさ。　今は気分が良いんだ。　アンタらも飲みな」
「い、いえ、俺達飲めないので」
　差し出されたジョッキを断ると、白けた様な顔をして中身を呷った。
「ふうん。　まぁなんでもいいさ。　しばらくここで飲んでいるつもりさ。　アンタらも飯なんかがほしいだろ？　ここを拠点にすると

いいさ。　なぁに、金は取らねえ。　そん代わり」
　と、銃を抜きながら続ける。
「酒もちょいと飲み飽きてきたところでねぇ。　アンタらちょっと暴れてみないかい？　腕に覚えはあるんだろう？」
　そう言われても……。　いかにこの恰幅のいい女海賊が戦えても、こっちは一騎当千の英霊だ。　誰が戦っても余裕に買ってしまうのは目に見えている。　それなら俺がカドックの魔術強化を受けて戦った方がいいのか……。　と、俺が一歩出たところを、カッドクが肩を掴んで止める。
「カドック？」
「待て、気づかないのか？　あの女の魔力、常人のそれじゃない。　ほぼサーヴァント並みだぞ！」
　なんだって!?　……。　確かに、よく見てみれば彼女からあふれる魔力は人間には出せないものだった。
「おや？　坊やは来ないのかい？　なんなら全員で来てもいいんだよ」
　挑発をするように銃を構える。　流石にこれで挑発に乗って俺一人で行っても勝てる自信もないし……。　だけどアルトリアにお願いしたら本気でやっちゃいそうだよなぁ。
「あの、先輩。　それなら私たち二人で戦うのはどうでしょう？　私達なら、魔力の消費を抑えられ、なおかつ私達なら殺してしまう可能性は少ないでしょう」
「……。　そうだな、よし！　俺たちが戦うよ！」
　俺とマシュが出ると、満足そうに構える。
「ああ、いいねぇ。　かかってきな！　アタシの名前はフランシス・ドレイクさ」
「俺は藤丸立香！」
「マシュ・キリエライト。　行きます！」
　俺とマシュが同時に飛び出し、ドレイクは狙いを俺に定めて銃撃を放つ。　しかし、それはマシュの盾が防ぐ……、思っていたらその銃弾は後ろの俺ごとマシュを後ろにふっとばした！

「うわっ！」
「この銃弾……。　いえ、銃弾自体は普通の銃弾ですね。　ならこの威力は？」
　マシュが叫ぶと、ドレイクが得意げに銃を手の中で回す。
「ああ、最近変な器を拾ってねぇ。　これを手に入れてから今まで逃げるしかなかった海の怪物にも攻撃が通じるようになってねぇ。しかの願えば酒も飯もいくらでも出るってすぐれものさね」
　あれは……。まさか……！
「間違いない！　あれは聖杯だ！」
「なんだって⁉　じゃあこの魔力の迸りは聖杯のものか！」
　「ちょっと待ってカドック！　確かにこの人聖杯を持っているけど、特異点の原因には思えないんだ」
「ふざけるな！　あいつが聖杯の所持者！　つまり特異点の原因なんだよ！　今こそ総出で戦うべきじゃないか！」
　カドックがそう叫ぶと、ドレイクは怪訝そうな顔をする。
「あん？　特異点？　聖杯？　何の話だい？　もしかしてアンタら、この変な状況について何か知っているのかい？」
　どうやら彼女は聖杯の持ち主であっても異変の現況ではないらしい。　とりあえず、現状の確認をする事にした。

「なるほどねぇ。　特異点。　聖杯」
「はい、私達カルデアの職員は聖杯によって引き起こされた異変の収束。　そして聖杯の回収を任務に行っています」
「ふぅん。　で、これがその聖杯ってやつなのかい？」
　ドレイクが聖杯を掲げる。
「これはアタシがこの前海で出会った化け物に大砲ぶち込んだ時にいつの間にか手に握っていたのさ」
「その経緯からみて、ドレイクが持っている聖杯はただ偶然この時代に在った聖遺物だろう。　つまり、この時代に聖杯が少なくとも二つあるんだろう」
　聖杯が二つ……。　今回は特異点が二つだったり聖杯が複数あっ

たり大変だなあ。
「あ、そうだ。　ドレイクさん。　ちょっと聖杯をお借りしてもいいでしょうか？」
「あん？　構わないよ」
　そうして借りた聖杯の魔力を使ってカルデアと通信を繋ぐ。　出てきてくれたのはロマンだった。
「立香君！　皆無事かい？　あと君達のすぐ近くから聖杯の反応があるんだけどどうしたの？」
「えっと……」
　と、今までの出来事を話した。

「ふぅん。　そっちの異変は大体分かったよ。　聖杯の魔力リソースを使って周辺をサーチしてみたけど、何もないんだよ。　土地も、大陸も。　恐らくそれが今回の異変だ」
「となると、移動には船が入りそうですね」
「ドレイクに頼んで船を貸してもらえないでしょうか？」
「ん？　船かい？　それなら、アタシたちの船に乗ればいいじゃないか」
　その提案に俺たちは顔を見合わせる。
「どうしようか？」
「だから、あなたがリーダーなのですから。　あなたが決めるのです」
「それは分かっているけど。　やっぱり皆の意見も聞いておきたいなぁと」
「そうだろうな。　藤丸。　僕は賛成だ。　ろくに航海技術もない僕たちだけでは探索は無理だろう。　それにマシュとお前を吹き飛ばした威力は対サーヴァント戦でも役に立つ」
「そうだね」
　そういってドレイク船長の提案を受け入れ、彼女の船『ゴールデンハインド』に乗り込んだ。
「さあ野郎ども、出航だよ！　帆を張りな！　錨を上げな！　ワイルドハントの始まりさ！」

第三特異点　女神の島

聖杯を持ち、人間の体でありながら、サーヴァントと互角以上に戦う女海賊フランシス・ドレイク。　彼女の船に乗り、点々と存在する島以外消えた大海原を探索することに決めた。
「とは言ったものの……。　これからの方針って結局決まってないよね」
「そうですね、この時代を狂わせている方の聖杯はどこにあるか判明していません。　キリシュタリアさんの方の特異点はあまりにも広すぎて大人数でレイシフトしたそうです。　だからこっちの方のサポートは少し疎かになるそうです」
　それはレイシフト前に聞いていた。　こちらと向こうの人数の違いがキリシュタリアがメンバーを選出するときに最も障害となった事だ。
「ロマンに聞いても聖杯の場所は探知できなかったしね。　今、カドック達が船員達に色々聞いてくれている。　もうすぐ帰ってくると思うけど……」
　と、話していたら丁度オフェリアが戻って来た。　マシュが駆け寄る。　俺が前の特異点でカドックと背中を預けあって戦ったことや、丁度男女比の関係で、この特異点に来てからは俺とカドック。　オフェリアとマシュの組み合わせで行動することが多くなっている。
　ドレイクの好意で俺達に二部屋あてがわれたから、部屋割りも男女で分けている、
「オフェリアさん。　お疲れさまでした。　それで、どうでした？」
「ありがとうマシュ。　ドレイク船長が依然戦った異常に強い海賊船が怪しいと話していたわ」
　とオフェリアがマシュに話していたらカドックも帰って来た。
「あ、カドックさんも戻ってきましたね。　お疲れ様です。　成果はどうでしたか？」
「ああ、海賊がこの近くで立ち寄れない島があると噂していた。　もしかしたら魔術的な防壁があるのかもしれない。　探す価値はある

だろう」
「流石カドックさんです！　これで行くべき場所が定まりましたね！」
　そのことはすでにドレイクに伝わっており、進路もその島のあるだろう場所に向かっている。
「……カドック。　貴方のサーヴァントキャスターでしょ？　聖杯の魔力リソース使って広範囲の索敵出来ないの？」
　と、オフェリアが腕を組みながら言う。　それはカドックの代わりに突然現れたアナスタシアが答えた。
「無理ね、ある程度は私も出来るけど私は近代のサーヴァントなのよ。
　しかも私自身にそんな逸話なんて無いし。　私がサーヴァントとして成り立っているのはこのヴィィがいてくれるからよ」
　そう言っていつも手に持っている人形の様な物を掲げる。　オフェリアがため息をつくのをよそにアナスタシアはカドックの腕を取って甲板の方に向かう。
「行きましょ。　私、海鳥が見たいわ」
「なら一人で行けばいいじゃないか！　分かった。　分かったって！
　引っ張るなよ」
　不機嫌そうなオフェリアとオロオロしてるマシュと俺が船室に残っている。　なんだか気まずい……。　すると、甲板が騒がしくなり、カドックの叫び声が聞こえる。
「藤丸！　敵だ！」
　甲板に飛び出すと、既に戦闘は始まっていた。　大砲の轟音が響き、水柱が何本も立ち上がる。
「カドック！　何がおこったんです？」
「オフェリア。　見ての通りだ。　真っ向から打ち合っている。　聖杯持ちのこっちと互角に戦えるって事は恐らく向こうも魔術的なブーストがかかっているだろう」
　ドレイクが指示を取り、何とか応戦しているが、素人目で見ても互角どころか押されている。
「あんたら！　悪いけど、手を貸してくれないか！　また奴が出たん

だ！」
「奴って？」
「噂の海賊船だよ！　何発撃ってやっても効かない厄介なジジイさ！」
　そうこうしている内に船を横に着けられた。　板が渡され、敵の海賊が乗り込んでくる。
「マシュ！　アルトリア！　応戦だ！　殺さないようにお願い」
　その言葉を聞いて、マシュとアルトリア。　そしてオフェリアのセイバーが飛び出した。　確かに、普通の海賊程度ならだれが出ても一瞬でカタが付くはずなのに、どの海賊も瞬発力、筋力共にサーヴァントに引けを取らない。　明らかにおかしい。
「カドック。　オフェリア。　多分これは……」
「分かっている。　明らかにおかしい」
「そうね。　恐らくこの船に」
　そう。　ここまで人知を超えた事が出来るなら、それは聖杯以外にあり得ない。
「カドック。　オフェリア。　船の守りを任せてもいい？」
　そう言いながらマシュとアルトリアに合図を送る。　二人の返事を待たずに向こうの船に飛び込んだ。
　やはりそこにはサーヴァントがいた。　大斧を持った男を先頭に、曲剣を持った女海賊とその横に銃を持った女海賊の二人組。　そして一番後ろには長槍を持った中年の男と明らかに海賊の長であろう服装の男で最後だった。
「おやおやぁ？　あのＢＢＡじゃなくてこーんな小さい子供が来たでござるなぁ？　まぁ拙者ショタ属性はないでござるけどまぁしょうがないでござるなぁ。　おんやぁ？　後ろにいい感じのメカクレ属性の子といい感じの女子がおるのぉ。　拙者、年増に興味は無いでござるがメカクレの子はまだいけるでござるぞぉ
　でゅふふふふふふ」
　……うわぁ。
「先輩。　私、盾持ちとして前に出なければならないのは理解してい

ます。　しかし、どうしても前に出ることが出来ないんです」
　マシュは意外と積極的で、戦闘も嫌いだと言ってはいるがなんだかんだ俺達を守ろうといつも最前線に立ってくれていた。　そのマシュが今にも盾を放り出さん勢いで震えながら俺の後ろに隠れている。
「マスター。　早く指示を、早くこの下郎を剣の錆にする許可を」
　反対にセイバーは剣を構えて前傾姿勢で今にも飛び出しそうだ。

「アルトリア、ステイ。　流石にこっちの人数が少なすぎる」
「でゅふふふふふふふ。　意外とそこの坊主はやるようですなぁ。
　しっかーし！　拙者もなかなかどうして意外とやるのですぞぉ」
　その言葉を合図に斧を持った男がゴールデンハインドに飛び乗った！
「まずい！　カドック、オフェリア！　そっちにサーヴァントが！」
「っち！　悪いがこいつは恐らくバーサーカーだ、抑えるのに手間取るだろう。　そっちの変態海賊はお前だけで……」
「こんの！　ティーチ！　良くもアタシの船にこんなむさくるしい野郎を！」
　そう言いながらドレイクがこっちに飛び込んできていきなり銃を打ち込んだ。　その銃弾は二人の女海賊に阻まれた。
「おっと来たなＢＢＡ。　お前みたいな年増本来興味は無いんだけどまぁしょうがないでござるなぁ。　さっさとあのロリっ子ちゃんを渡しな！」
　あのロリっ子？　ハインド号には子供はいないはずだったんだけど……。
「やかましいね！」
　と、叫び銃撃を打ち込みながら俺に耳打ちをする。
「一旦引くよ。　合図したら嬢ちゃんたちと船に戻りな。　アタシもその後戻る」
「分かりました。　でも隙は俺たちが作ります」
「頼もしいねぇ。　じゃあ行くよ！」

ドレイクが銃撃をし、船に跳び戻る。　俺もマシュの手を握ってドレイクに続きながらアルトリアに魔力を注ぐ。
「アルトリア！　頼んだ！」
アルトリアの剣から風が迸り、ティーチ達の動きを止める。　風が収まったときには俺たちはすでに逃げ出していた。
しかし、問題はまだある。　船にまだ敵のサーヴァントがいるのだ。　斧持ちのバーサーカー。　オフェリアのセイバーが今は抑え込んでいるが、戦況は厳しそうだ。
「オフェリアさん！」
マシュが飛び込み、二人の間に割って入る。　今度はマシュにありったけの魔力を注ぎ込んで、強化する。
「はあああああああああ！」
盾のからの障壁で、バーサーカーを吹き飛ばす。　何とか距離を取り、体制を立て直し、陣形を取る。
「あんたらは下がりな！　戦いは任せて全速で逃げるよ！」
その言葉に海賊たちは出来る限り空間を作り、ティーチの船から出来る限り遠ざかる。　こっちの船の方が速いから逃げるのは出来そうだ。　出来る限り遠ざかればこのバーサーカーへのパスが弱まり、ある程度有利に戦えるだろう。
「カドック、相手の特徴は？」
「典型的な暴れるだけが能のバーサーカーだ。　恐らくこれほど離れれば宝具も満足に打てないだろう」
「よし、マシュ！　そのまま抑えといてくれ！　オフェリアのセイバーは攻撃の準備を！」
俺の声に反応してセイバーが後退し、魔力を溜め始める。
「セイバー。　お願い」
「承知」
オフェリアの声に短く応え、超高速で敵に刃を突き立てる。　セイバーの姿が見えるころには、バーサーカーは霊核を砕かれ、その姿を消していた。
「す、すっごい」

「キリシュタリアのカイニスなんかには劣るけど、私のセイバーだって中々やるのよ」
少し誇らしげにオフェリアが言う。　流石セイバー。　あれ、そういえば……。
「ずっと気になっていたけど、オフェリアのセイバーって真名は何なの？」
オフェリアは少し腕を組んで考えたけど、首を振る。
「さっきの戦いは評価するわ。　でも、やっぱり真名を気軽に晒すのは……」
「いや、今回は僕からも頼む。　やはり真名が分からないと連携が上手くいかない可能性がある。　確かに自分のサーヴァントの真名を晒すのは抵抗があるだろうが、頼む」
カドックも頭を下げると、オフェリアは首をひねって考える。　そこまで意地を張る理由はないけど、真名は教えないと言った手前、プライドが邪魔をして言うに言えないのだろう。
「……マシュ」
「ハイ！　オフェリアさん。　やはり、私たちには教えていただけないのでしょうか……。　前に出るサーヴァントの皆さんを守るのは私の務め。　それで真名を教えていただけないという事は私がまだ未熟だからでしょうか……」
マシュが近づいて上目遣いでオフェリアに頼み込む。
「s、そんなんじゃないわよ。　……。　もう、分かったわ。　あなた達のサーヴァントの真名を知っていて
私だけが隠すのもフェアじゃないわね」
マシュの説得（泣き落とし）で折れたものの、まだ理由を並べて言い訳をする。　さっきまでは俺にきつい視線を送っていた彼女が、今はマシュの一挙手一投足アワアワしている。
「ね？　教えるから、泣かないで？　」
マシュがオフェリアに見えないように俺達にこっそりピースを送る。
「私のセイバーの真名は北欧の勇者。　ファブニールを倒した伝説の

ある、魔剣グラムを振るう英雄。　シグルドよ」
　ジークフリートと同一視される北欧の英雄シグルド。　前の時代で共に戦ってくれた彼と同じ、もし区は全く違うとされる人物。
「そう。　当方の名はシグルド。　オフェリアの剣となるものだ」
　仮面を外した彼の顔はジークフリートとは全く違う顔であった。
「君たちの戦いは当方も聞き及んでいる。　しかし、当方にももう一人の竜殺しの英雄と同じかどうかは分からない」
　とにかく、一旦はあいつらから逃れたけど、どうにかしてあいつらに対抗できるような何かを探さないと……。　そういえば
「ドレイク船長。　あっちの海賊が言ってたロリ？　って誰の事なんですか？」
　俺の質問にドレイクは苦い顔をする。
「それがねぇ……。　アタシにも分からないのさ。　でも知らないっていうのもシャクでねぇ」
　他の海賊達にも聞いてみたけど、詳しい情報は得られなかった。
それにしても、小さい子を探すって……。　このいつも以上に広い海でどうやって……！
「ねぇ、ドレイク。　一人用の船で小さい子供がこの海を渡るなんて無理だよね」
「勿論さね」
「ならさ、どこかの島にいるはずだよねぇ。　そしてあいつが探してるくらいだからサーヴァントだよね。　で、サーヴァントなら島に隠密の魔術くらいかけるよねぇ」
「……なるほど。　丁度いいねぇ。　このあたりが噂の島の近くのはずだねぇ」
　それなら、ここから先は俺達の出番だ。　マスター達がカドックに魔力を送り、それを
　アナスタシアに。　そしてアナスタシアも聖杯と俺たちの魔力を使って最高範囲でレーダーを張る。
　待つこと数分。　俺達でもティーチの海賊船でもない魔力反応が見つかるのだが……。

「反応がおかしい？」
「ええ。　サーヴァントであることは間違いないのだけど……」
とにかくその島に向かうことにした。
その島にたどり着き、魔力の隠蔽をはぎ取ると、その名も無き島が現れた。　小舟を出し、俺達とドレイクだけで上陸した。
「さて。　くだんのお姫様はどこにいるんだろうね？」
「お姫様なんていないわ。　いるのは女神だけよ」
声のする方向に振り向くと、さっきのバーサーカーと同じくらいの巨体の男と、その男に肩車されている女の子がいた。
「えっと。　君達がこの島を隠していたサーヴァントでいいの？」
「ええ、良かった。　あのむさ苦しいおじさんじゃなくて」
「ティーチを知っているの？」
自称女神は首肯する。　すると、カドックが俺の袖を引っ張った。
「おい、何気軽に話しかけているんだよ。　あいつがほんとに神ならとんでもないぞ？」
カドック曰く、英霊召喚システムでは神に値する存在は呼べないらしい。　英霊と神霊は根本から違うらしく、さらに神霊も基本呼びかけに応じる事はないらしい。
つまりこのサーヴァントは英霊の身でありながら神を名乗る不届き者か、本当に召喚された神のどっちかだという事だ。
「ええ、私は本物よ。　真名はエウリュアレ。　私が英霊になった時に神格が大分落ちて本来の力は出せないのよ」
と言ってももとより彼女は戦う力のないサーヴァントで、それも召喚された理由の一つと考えられる。
「えっとつまり……」
「ええ。　貴方たちの船にの手上げてもいいけど戦うのは嫌よ」
と、まさかの戦闘拒否宣言。　しかし、ドレイクは快諾。
「こんな美人が船に乗ってくれるなんて最高じゃないか！　野郎どもの士気も上がるってもんよ！　で、そこの女神さんの付き人みたいになっちまってるいい男よ」
エウリュアレを肩車している男は真名をアステリオス。　通商を

ミノタウロスと呼ばれる男だった。
「えっと。　ミノタウロスってギリシャ神話とかの牛男だっけ？」
俺の疑問にカドックが部妙な顔をして答える。
「ああ。　まぁ、そんなもんだ」
そうして、女神エウリュアレとアステリオスの二人が仲間になって再びゴールデンハインド号を出航させた。